

# 栄力丸漂流記『東西異聞 天』複写版の翻刻（部分）と解題

茂 住 實 男

## 【解題】

『東西異聞』は、姫路藩の国学者一色見龍広信が中心となって、栄力丸漂流民清太郎、浅五郎（浅右衛門）、甚八、喜代蔵の四人に漂流の顛末を尋ね、その語るところを書き取り、編集した漂流記である。本書は天（巻一、二）・地（巻三、四）・人（巻五、六）の三冊から成っている。成立年についてであるが、筆者菅生信胤はその「こと書」末尾に「安政二年乙卯九月」と記し、序文を寄せた広信の師野之口隆正は「安政ふたとせといふ年のはつき」と記し、また広信は「題初」（自序）に、草稿は（安政二年八月の）「月末にかき終」わったと述べていることなどから、安政二年（一八五五）の九月というのが妥当であろう。

摂津の樽廻船栄力丸は江戸からの帰りに熊野灘で大北風に見舞われ、梶を破壊され帆柱を失い、自力で航行するこ



『東西異聞』（播磨町郷土資料館所蔵）

とができなくなり、嘉永三年（一八五〇）一〇月に漂流船となった。栄力丸乗組員一七名は五〇日余り漂流したところで米国商船に救助され、サンフランシスコに送られて（嘉永四年二月）、そこで二年ばかりを過ごす。その後、軍艦セント・メリー号で香港に送られ（嘉永五年四月）、香港で軍艦サスケハナ号に移されて中国各地を廻り、上海に着く（嘉永六年二月）。上海でサスケハナ号を下艦し（同年三月）、長崎との貿易港である乍浦に向かう。乍浦で一年余りを過ごした後、安政元年（一八五四）七月一二日中国船源宝号で乍浦を出港し、同月二七日長崎に着した。その間に病死する者（二名）、アメリカに引き返す者（三名）、サスケハナ号に残される者（一名）、乍浦で出奔する者（一名）があり、長崎に上陸した者は一〇名であった<sup>1</sup>。

栄力丸漂流民は長崎奉行所で先ず踏み絵を命ぜられ、そのちに乗組員のことを始め積荷、海難、救助、救助後の海外生活、送還などについて取り調べを受けている。取り調べが終わった漂流民は、それぞれが生国から迎えに来た役人に連れられて帰国している。播磨国加古郡西本庄村の清太郎、浅五郎、甚八と、同郡東本庄村の喜代蔵の四人が姫路に帰り着いたのは、安政元年二月一八日であった。

〈編者について〉 上述したように清太郎ら四人からの漂流体験の聞き取りと、その編集を中心となつて行ったのは、姫路藩の国学者一色見龍広信であるが、他に同藩藩校好古堂の国学教授秋元安民も加わっている。さらに安民の師で

あり、また広信の師でもある国学者野之口隆正も、何らかのかたちで係わった可能性がある。筆記者は広信の弟子菅生信胤である。『東西異聞』が、国学者たちによって編集された漂流記であることから、同書を検討すれば当時の国学者の米国観など対外認識の一端を窺うことができよう。そうしたこともあり、中心人物であった広信の経歴などを知りたいところであるが、残念ながら、はっきりしない。<sup>②</sup>そこで広信に影響を与えたと思われる師の野之口隆正、また兄弟子に当たる秋元安民の修学歴など一部分ではあるが取り上げて、そこから広信のことを推測してみたい。

野之口隆正（大國隆正、一七九二～一八七一）は幕末維新期に活躍した国学者で、石見国津和野藩士今井秀馨の子として、寛政四年（一七九二）江戸の藩邸に生まれる。<sup>③</sup>のちに野之口と改め、さらに大國を称した。文化四年（一八〇七）一六歳のとき平田篤胤の門に入り、さらに昌平坂学問所に入って古賀精里のもとで儒学を学び、同六年に同所の舎長となる。また日本の音韻に関心を有していたが、本居宣長が音韻の学に精通していたのを聞いて、宣長の門人村田春門についてその教えを受けた。文政元年（一八一八）二七歳のときに長崎に五か月ほど遊学し、蘭通詞吉雄権之助（一七八五～一八三二）に西洋の理学を学び、また仏教関係の文献も渉猟するところがあつたと伝えられる。同一二年（一八二九）に故あつて津和野藩を脱藩し、姓を野之口と改める。天保六年（一八三五）大阪に出て国学を教授する。同一二年（一八四一）京都に移り家塾報本学舎を開く。嘉永元年（一八四八）五七歳のとき好古堂において国典を講じた。『増補大國隆正全集』（全八巻、二〇〇一年、国書刊行会）がある。

秋元安民（一八二三～一八六二）は幕末の国学者、また洋学研究で、播磨国姫路藩士秋元右源次包菊の次男として、文政六年（一八二三）姫路に生まれる。<sup>④</sup>通称正一郎。国学者野之口隆正に入門し国典および歌文を学ぶ。隆正に請われ養子となるが、のち離縁して秋元姓に復す。小浜藩士伴信友について国学を修め、その後播磨国三木に国学私塾を開く。嘉永年間姫路藩は好古堂に国学寮を設置するが、安民はその国学教授を命じられる。安民は傍ら洋学にも

志し、西洋事情を研究し、また写真術を試みたという。<sup>(5)</sup>

安民は清太郎から聞き取りなどをするうちに、彼らに西洋型帆船の知識があるのを知って、藩主に帆船の建造を建言し、清太郎らの協力を得て速鳥丸、神護丸を造るのであるが、その西洋型帆船の利点、有用性などを聞かせてくれという、安民が清太郎に書いた手紙がある。排外、攘夷の当時にあつて興味深いものであり、参考までにその部分を引用しておきたい。(一)内および傍点は引用者。文中の「シコノ船」「シコノ」は西洋型帆船のひとつスクナー・schooner のことである。

(トノ様ガ)ソレニツキマタヒトツ清太郎ラヘタツネクレト、ナイ／＼コノ方マテオンタツシノ事コレアリ。  
ソノシダイハ、カノアメリカニテノリオホエ候シ・コノ船ハ、ズイブンデキルモノカ、デキタラベンリナモノカ、  
モシ四人ノモノガオホエテキテ、コシラヘテミヤウトオモウナラ、ナニホト金ノイルコトゾ、クハシクキキタダ  
シテゴンジヨウイタセトノ事ニ候。オモノイリノナカナレド、トノサマハフネノ事シキリニオココロニオカケナ  
サルトアイミヘ候。カヤウナアリガタイオホセジヤニヨツテ、ナニトゾ右ノシ・コノ・ヲツクルヤウニイタシタク候。  
オヨソナニホドカネガイルトイフ事、ハヤクキカセテモライタク候。

ナニブンゴクロウナガラ、キテモラハネバソウダンガデキマイカトゾンジ候。用事バカリ 以上

(安政二年)十一月六日

正一郎

清太郎殿<sup>(6)</sup>

安民が進取の気象に富んでいることはこうした手紙にも十分現れているが、安民は「国学を基礎として西洋の知識を採り、開明進取を志した人で、その師野之口隆正らとともに幕末国学の新たな方向を示した。」<sup>(7)</sup>と評価されている。右の手紙で安民(正一郎)と清太郎(ら)は姫路で会つて西洋型帆船スクナーの利点、その建造知識の有無や費

用のことなどを話し合ったのであろう。安民を責任者として、清太郎を造船大工指揮者に、また浅五郎らにもそれぞれ役割を与えて建造が始まった。安政五年（一八五八）に速鳥丸が完成し、文久三年（一八六三）頃には神護丸が完成している。

さて一色広信であるが、師である野之口隆正も兄弟子の秋元安民も、述べてきたように国学者であり、かつ洋学あるいは西洋事情を研究していたことから、ふたりの影響もあって、国学をもっぱらとしながらも、洋学や西洋事情に興味を抱くようになったものと推測される。そして広信は『東西異聞』自序の中で、「アメリカ」イギリス「ヤロシヤ」、この三国の治乱、盛衰、武備、人情等を諸書の説を輯正して海防の一助ともなさむものと志を起して、やゝアメリカ風土記を七八分か」いたと述べていることから、異国事情をかなり研究していたことが知られる。そうしたアメリカなどの知識を持った広信がアメリカ、中国を体験した漂流民から諸情報を聞き取り、それらを編集して、『東西異聞』を著したということができよう。

〈聞き取りが行われた時期〉　ペリーが嘉永六年（一八五三）に浦賀に来航し、そして翌安政元年に再来航して、日米和親条約が調印された。鎖国から開国に転じたわが国は幕府、各藩とも外国の情報、とくに欧米列強の情報を急ぎ収集する必要性に迫られることになった。そうした安政元年の一二月に、アメリカで丸一年、その後アメリカ軍艦で移動すること一年余、また下艦後は、上海で一か月半余、乍浦で一年三か月余と、アメリカ、中国を三年半にわたって体験した清太郎らが、姫路に帰ってきたわけで、国防や海外事情に関心を持つ藩関係者や学者が、彼ら漂流民から、当時の生の情報を聞き取りたいと強く願ったのは自然なことであった。

聞き取りが行われた時期であるが、『東西異聞　天』に付された広信の自序に、「やゝアメリカ風土記を七八分かきたる比、当国の舟人アメリカより帰朝せしとて、去（安政元年、引用者）十二月町宿に泊りぬ。吾行て異国の事とも

聞つるに、国家の爲となるべき説どもいと多かりければ、こゝ委しく聞正さむと思ひて、明る正月大旨をきくに、云々」とあることから、広信は清太郎らが姫路に帰着早々に聞き取りを行っていたことになる。翌一月（安政二年、一八五五）も聞き取りを進めているが、さらに二月にも行われた可能性がある。同月中旬頃清太郎らは藩の取り調べや広信らの聞き取りを終えて郷里へ帰るが、四月には姫路城下の広信の私宅で、広信の「業の暇毎に質問」（自序）を受けている。ただそのときは清太郎ひとりなのか、浅五郎ら三人も一緒であったのかは判然としない。<sup>⑩</sup> 広信はさらに清太郎（ら）に「六月の始より再び聞正して、云々」（自序）と述べているので、けっきょく安政元年一二月から翌年の六月にかけて断続的に聞き取りが行われていたということになる。以後は漂流者たちの話に参考、追考、諸説を加えて、八月末に草稿を書き終えた、と広信は記している。

〔東西異聞〕編集の目的 上述のように漂流民から、アメリカを始めとする異国の最新情報を収集することが目的であったが、広信は『東西異聞 天』の自序において、国家を思い国防を考えるなら、彼を知り己を知らなければならぬ、そしてそのためには世の変革を知る必要があるとして、世界の動向を知り、「死学」ではなく「活学」を学ばなければならないとも述べている。そして、『東西異聞』に「記せる異国の盛衰、人情、強弱、武備、兵器、軍艦製造等をよく／＼考知るへし。是実二彼を知る活学にして必勝を得る根本也。」（自序）と述べていることから、広信は漂流民から聞き出した情報を、「活学」を学べるように編集して、『東西異聞』を仕立て上げようとしていたと見ることができる。

ところで『東西異聞』を編集するにあたり、広信も安民も海外事情を取り扱った書物などを研究し、また引用している。参考までに「天」の部に引用などされているものを掲げておきたい。漂流民万次郎関係、永住丸（永寿丸などとも）漂流民亥之助・弥市関係、永久丸漂流民勇次郎・作蔵関係のそれぞれの漂流記を始め、次の諸書がある。

海国兵談、千代田問答、平天儀図解、武備要略、環海異聞、異船実聞記、海島逸史（海島逸誌か）、新国図志（新国図志通解か）、采覧異言、坤輿図識、鎖国論、大同類聚方、答問十策、日本書紀、海国図志、遭厄日本紀事、奉使日本紀事（奉使日本紀行か）、蝦夷乱暴記（蝦夷乱記事か）、辺要分界図考

『東西異聞』は、上に見てきたように興味深い漂流記である。本漂流記の存在を知ったのは、かなり前のことになるが、播磨町郷土資料館（兵庫県）に栄力丸関係の調査に出向いたときである。手に取って見たのは複写版の『東西異聞』であったが、読んでいるうちに、翻刻をして、以前翻刻した別の栄力丸漂流民による漂流記と比較をしたいと思いますようになった。原本に当たるべきと思ったが、探し当てることができなかった。

そういうわけで、同資料館に、複写版『東西異聞』を底本として翻刻する許可を願い出ることにした。タイトルに（部分）と付けたのは、『東西異聞』には絵図がかなりあるが、紙幅の関係でそれらを少なからず割愛せざるを得なかったためである。幸いにも同資料館より翻刻許可を得ることができた。同資料館には勝手な申し出を受け入れていただき、心より感謝申し上げる。

最後になったが、山田瑩徹氏には翻刻の過程で有益な助言を頂いた。記して深謝申し上げる。

## 注

- (1) 漂流のあらましは以前本論集第五九輯（平成二五年三月）で述べており、本稿では漂流民たちの在米、在中の期間などを示すにとどめた。
- (2) 『国書総目録』によれば、広信は「東轡漂談」（成立年不詳）を著している。広信が『東西異聞 天』の自序で言及している「アメリカ風土記」あるいは「亜米利加風土記」というのは同日録には見えない。
- (3) 野之口隆正（大国隆正）については、大川茂雄他『国学者伝記集成』第二巻、昭和九年、国本出版社）、岡田実『大国隆正』

(昭和一九年、地人書館) などによる。

岡田は隆正が長崎で吉雄権之助に西洋理学を学んだと記した後、「隆正が後年発表せる論著に、泰西の窮理的要素を巧に取り入れて、古典の解釈に前人未到の新天地を開拓し得たのも、この長崎遊学の賜であると云はねばならぬ。(略) 青年隆正が異国情緒の極めて濃厚な長崎の街、蘭人や清国人の匂ひ漂へる中に、好奇の眼を輝やかし乍ら、貪るやうに新しい知識の吸収に目もこれ足らぬ様であつたことと想像される。」(二六頁) と述べている。

(4) 秋元安民については、萩原正太郎編『勤王烈士伝』(明治三十九年、勤王烈士頌功建碑事務所)、「怒濤を越えた男たち」編集委員会『怒濤を越えた男たち』(平成九年、播磨町・播磨町教育委員会) などによる。

(5) この写真術については、「当時写真術の如き、未だ一般に聞知せざりしものに至りても、亦能く之を研究し、大阪の大医緒方洪庵と共に、其製造を試みたることあり、云々」(秋元安平「〇贈正五位秋元正一郎」(前掲『勤王烈士伝』所収、三九六頁) とある。緒方洪庵(一八一〇—一八六三)の写真術研究については詳らかではないが、この一文は安民が洋学を学んでいたこと、また洋学者との交わりがあったことを示すものと見たい。

(6) 前掲『怒濤を越えた男たち』所収、一七九頁。

(7) 『国史大辞典 1』昭和五四年、吉川弘文館、九七—九八頁。

(8) (9) 前掲『怒濤を越えた男たち』二七五—二七六頁。

(10) 前掲『怒濤を越えた男たち』二七六—二七八頁。

(11) 拙稿『漂流記談』—栄力丸乗組員・利七漂流記談の翻刻と解題—(一)『大倉山論集』三六、平成六年) など。

## 凡例

一 底本 複写版『東西異聞 天』(一色広信編。安政二年九月) 播磨町郷土資料館所蔵。

二 翻刻を行うにあたり、底本を尊重し忠実に伝えることに留意したが、底本には改行、句読点がなく、通読の便

も考慮して、次のような方針を立てた。

- 1 漢字は原則として常用漢字に改め変体仮名等は通行の字体に改めた。
- 2 適宜改行を行い、句読点を付した。但し、野之口隆正の序文には句点のような「。」が付してあるため、この序文に関しては翻刻者は一切句読点は付さなかった。
- 3 ルビは原文のままとした（ときに「辛く」のようなルビもあるがそのままとした）。なお翻刻者によるルビは「ひらがな」、あるいは（か）で示した（原文に付されたルビはすべて「カタカナ」である）。
- 4 本文の誤字脱字等を訂正するために付された頭注は、頭注に従って本文を訂正し、その旨を記した。（「」内は『東西異聞前編』で補った部分である（一か所）。
- 5 本文中の二行割り書きは「」で示し、一行組にした。
- 6 闕字・平出はそのままとした。
- 7 判読困難の文字には□、□をあてた。
- 8 頭部に適宜小見出し様の語句を付した。

## 東西異聞 天

こと書き・菅生信胤

吾師加喜の屋大人、世を慷慨て思、御たつねはありける時しも、編在所といふ戎国へた、よひゆきて帰り来にける船人ともありけるを、よき鶴<sup>たづ</sup>寸にこそとて、大人の御許に呼給ひて、その国風を委曲にきかして、又ちかき年頃外国まなひによせ給ひて、こゝろの内におほしあきらめたる事多在をも加へて、己に仰せてしるさしめ給ひし。これ乃六卷なりけり。書の題号は東の国にながれ射往て、日放西の邦々をへし物語を、あやしときかし、由によりて、東西異聞とつけ給ひぬ。

かくて此ふみを見む人、わが国は心もしわさも不穢た、しく、とつくにくハわろくきたなきわきためを熟わきまへてよ、これ、大人のつとめられたる心さしにそありける。己も世の人並に戎籍をまなひて、其ひか事にあひましこらむとせし。

をりしもゆくりもなく靈幸ふ神のめくみとかきの舎のかきつに参入て、清き学ひをまなひそめしは、去年の春のはじめにこそありしが、今年十まりいつ、になも成ぬる。よはひもまたしく、大人の御許にさもらふ月日もいくほとなきに、此ふミをかきて後、いよ、ますく吾国の尊く、とつくにくのいやしき事をうまらに、よくさとりけるこそうれしけれ。こさかしくこと書なとせむは、いとさしすきても思ほゆれと、た、にも得あらてなむ。かくいふハ訶記の舎に物学する

安政二乙卯九月

序文・野之口隆正

天地を鎔造りまし、時。むすひの神の。これの大八洲国を。国の本くにとさためたまひとつくに  
くをは。これにしたかふ末くに発くにとなもさためおきたまひける。さるをもちしより。儒の  
道、仏の道入来て。そのまかことにくちあひましこりて。人のこゝろねつけそめたるを直毘の神の  
かむなほひになほしたるぞ。もつつ教の世にあらはるへき時に来むかへるは。よろこほしくうれし  
き御代になもある

このときにあひて。はりまのふなひとか。あめりかといふくに、わたり。もろこしをへてかへり  
来ぬるものかたりをきくに。とづくにハ末くに枝くになれハ。よろついやしく。わが大八しまく  
に、くらへてハおとりてありけり。にしのえみしとも。くにのくらゐをわけて。ミかとのくらゐ。  
こにきしのくらゐ。くにのミやつこのくらゐなといふなり。そのさためにつきていへは。わがおほ  
ミくにハ。たかミかとのくらゐをこえて。大みかとのくらゐあるくに、なもある。もろこしふりの  
ことはにうつしていへハ。大帝爵のくにといふへし。

おのれ隆正このことをはしめていひいて、。人にとひはかるに。たれしの人もよろしといふなり。  
いひ出したるハ隆正なれと。このくらゐハも。おのつからこれのミくに、そなはりてあれハなりけ  
り。

一色広信。そのふなひとかものかたるをきゝて。きゝすてむはあたらしとて。しるしたるこのふ

みとわかくには。大帝爵のくに、して。とづくに／＼は。これにつきしたかふへき枝国といふことを。さとりつへきはしたとなりぬへく。おむかしきふミにもある。見る人もたゝそのめつらしきに。こゝろをうつさす。これを見てもろこしひとのいやしくあしきことをしり。東にしのエミシらか。こゝろひろきことをはかり。されとも我国人の。たゝしきをゝしきにハおよハぬことをさとりてよ此広信は教子にて。かゝるふミをいたつきなすは。おやのこゝろにうれしくて筆をとゝめす。おもふこゝろをのこさすしるせり

安政ふたとせといふ年のはつき

野之口隆正

題初（自序）・一色

題初

広信

彼を知り己を知るハ兵家の極意なるよしハ、古くより書にありて、実に将たる人、此意をよくしら更むハ有へから更され。抑広信思ふニ、世の变革をしら更むハ、真に彼を知り己をしるにあら更。此ハ彼をしり己をしる言にて（頭注による）籠り有こと見ゆれ。抑細密に考見る時ハ、おのつから別也。

兵法の变革

其意の大略をいはむに、中古までの戦争ハ皇国同士の戦ひなれと、今異敵を吾海岸に引請戦はむにハ、其兵法おのつから異なり、此ハ海国兵談に大江匡房を始として楠正成、甲越二子の如き世に軍の名人と称するも、其元ハ唐山の軍書を宗として稽古ありし人々成ハ、皆唐山流の軍理のミ伝授して、海国の議に及ふ事なしとなむいへる如く、今天晴兵学士と称する人々も皆此流なれハ、今異船を吾海岸に引請一戦に及ひなば、是迄の学ひ得たる兵法ハ大ニ相違すへし。此ハ清人、英国人に大敗を取たるを見て証とすへし。此、兵法の变革たるもの也。

旧來の兵法は死學、  
万国の書で活學を學  
ぶべし

#### 兵器の變革

軍の勝敗ハ軍師の胸中にあるもの也。故に兵法の死活を正し玉ふ事專一なり。今の世、兵學者と稱する人々を見るに、多くは己が家に代々伝たる法にて、又自も是に勝りたる法ハよもらしと思ひつれと、此は古の活術にして、當時の死學ならん。故に広く万国の書を見て、當時活術の兵法を學すむハ必勝の軍ハなり難からむ。

又人情、強弱、古今異なる事ハさし置いて、先兵器の變革をいはむに、上古は鉞、劔なりしも、鉞ハ長柄或槍となり、又劔は長刀となり刀となり、又遠間の戦にハ弓のミなりしも、鉄炮種ヶ島より渡り、其を山本道鬼打試ミたり。此ぞ 皇國炮術の始なりける。されど今の世の如き大炮にハあらで、城攻の仕寄にハ竹束杯にて防ぎしもの也。然るを今ハ火術も委しく成、又其具も種々ありて、戦ひ十の八九は皆火術なり。是火器の古今變革したるものなり。

火術…異國は日々進  
歩、皇國は未熟

火術ハ中古異國にて初て發明したる物にて、彼國ハ戦争打続ぬれハ、其術日々試ミ日々に精密しくなりて、實に其わさ恐るへし。然を 皇國ハ中古より今に太平の世成ハ、鉄炮の製造ハ元より其術未熟ならむ。故ニ炮術の師ハ云に及ハす、此道を學ふものハ、よくく 此心得あらまほしき事になむありける。

#### 船の變革

又船ハ神代より 皇國にありといへ共、たゞ海岸運送の具成ハ、其製造甚るる略なり。此ハ陸戦のミにて水戦いと稀成ハ也。されど異國にてハ水戦を主とする故、其製造も甚精密なりて、種々の大艦あれハ、今海岸にて異船と戦はむニハ、何を以て敵せんや。かく異國にてハ大炮の世成ハ、吾國龜略の船ハ彼の國の大炮一発にて忽破裂すへし。此古今船の變革なれハ、船も彼國に習て堅固に造らすむは、必勝の水戦ハなりかたし。

本書により戦法、兵器を学ぶべし

海上の戦には軍艦と海軍伝習が必要

斯皆世の変革によりて戦法兵器も異成は、将たる人ハ元より国恩を思ふものは、この書によりてさとり玉ふへし。

陸上の戦ひは強馬を要とす。海上の戦は堅固の軍艦を以て要とすへし。今大城の如き軍艦数艘、吾海岸に來りて大炮を發てハ何をもつて敵せむや。唯海岸を固めて眺め居るのミならん。

故に一日も早く堅固の軍艦を造らすむハあるへからず。又兵士も常に船に乗たる事ハいとく稀なりけれハ、天晴の勇士も船中にてハ忽ち病者となるならむ。是又稽古せずむハ有べからず。次に彼を知へし。此ハ誰しも常によく言ひ給ふ説にはあれ、抑実に彼を知りたまふ人ハ、世にいとく稀なり。此ハ前にもいひし如く世の変革をしらざる故、唐山流の兵法にて今の世の戦ひも成ものと思ひて、異域の書を見されハ、皆死学にて活学にあらずハ、実ハ彼を知たるにあらず。故に有眼の人ハ眼を開きて、この書に記せる異国の盛衰、人情、強弱、武備、兵器、軍艦製造等をよくく考知るへし。是実ニ彼を知る活学にして必勝を得る根本也。

実用の学第一は和学、第二万国の学、第三漢学

當時学をなす人を見るに、無用の学ひをする人多くして、実用の学を成人はいと稀也。第一学ふへきハ和学なり。若異人より 皇国の事を尋なハ如何答へむ。吾ハ漢学者成ハ漢国の他ハしらすといはむか。故に、和学ハ第一しらすむは有へからず。次に万国の学をなすべし。此は當時主要の学にて、彼をしる活学なればなり。次に漢学を成へし。されと何事も漢国の説ハよしと思ひ、吾産国の事ハ何によらすあし、と思ふ俗儒の学ハ、学ばざる人に劣れり。

又知すむハ有へからざるハ、近年吾海岸へ來りて交易和親を願ふ其内心を、諸書によりてよくく心をくだきて考へさとりとるへし。此、彼を知る第一の主要なり。

交易和親を願う異国の内心を考えるべし

アメリカの野心

ロシアの野心

東方にハアメリカ洲ありて、寛政九年ステワルドといふ者、初て長崎に来る。此、皇国を窺ひし初にて、其後度々吾海岸に來りて虚実を窺ひしる。終に浦賀ニ來りて交易和親に事よせて、内海近海等の測量をなす。其内心許りかたき説ともハ、此書に委しく云を見るべし。

又北方にはヲロシア国あり。ペイトルといふ帝、五大洲を一統せんの大志ありしも、其志終らずして享保九年ニ死す。其后勇猛、帝にまさりて大志を統、段々東方の地を蚕食し、終に 皇国のカムサツカより蝦夷の千島を蚕食したり。夫より蝦夷地を蚕食し、終ニ 皇国を併吞せむの大志有故、蝦夷地を折々乱妨し、或ハ海岸を測量し或ハ漂流民を送り、或ハ交易和親に事寄杯、種々さまざまに謀計をめくらして、近年まで 皇国の虚実を窺ひつれど、吾国は 神国にして容易ニハ併吞なしきたくや思ひけむ。

エウロツハ諸洲より印度、唐土、皇国、両アメリカと次第に蚕食して、終に五大洲を一統せむと謀計をかえたりと見ゆ。其証は両三年前よりトルコと大戦を始めたしか、エウロツパ洲ハホナバル帝の戦争治まりし後ハ、一統会盟したる為成ハ諸国、トルコの加勢をなす故、今ハエウロツパ諸洲を敵に受たれ共、ロシア国は甲乙の戦をなす強国なり。

イギリスの野心

又西方にハ小さかしき国多き中ニも別てイギリス国ハ、是又五大洲を一統せむの大志ありて、本國ハ 皇国よりも小国なれ共、五大洲海岸の国々を併吞し、今ハ天下一二の強国にて、慶長二年和蘭船と共に肥前平戸へ来る。此 皇国を窺ひし始にて、其後折々吾海岸へ來りし事も有とさせる事もなかりしが、近年ハ交易和親に事よせ、年毎ニ來りて虚実を窺ひ、或海岸を測量し、或無礼事をいひ、或ハ近島へ上りて乱妨杯して、兵端を開かむとすれど、吾国にてハ遠き慮まし／＼て、穩に

朝鮮漂流民の書簡

御扱ひなし給ふ故、唐国の如き戦争にハならざるなり。されと 皇国を併呑セむの心ある事久し。

其一証とすべきハ、朝鮮の漂流民、イギリス国より産国の友へ送りし書翰に、戊戌秋云、西洋之富豪无。若英国者然貪婪不厭以未得五大洲為懽矣人物之偉才慮之秀亦無抗英人者由是其輕視四方也如兇輩其意專在併呑五洲且併呑功以漸可成故欲先得東海中之一州而以固其基也。英人皆云韓和及球土壤相並唇齒相依欠一亦自斃蓋其最強者倭也。倭雖強自以為足無敢覬他国之者退而能自守其勢又誰俄当也。独如韓与球者偏小之地。縦者中国之援也。唾手則得之不出期年之外也。然先韓後球邪代球及韓邪議未決也。雖議未決寇之至必在近とある。此文意にて准し知るべし。

わが国を併呑しよう  
との陰謀

又去寅年ロシヤ船寄陽退帆の時言上げるハ、アメリカより日本を窺ふ事久し。何にまれ大炮、軍艦多き方勝利を得るものなり。故ニ此二品は何程ニてもさし出し御味方なさむ杯、隠計をいひ、又イギリス人ハロシヤより日本を窺ふ事久し、此又御加勢なさむ杯言しとか。これ皆表に実を見セ裏に隠計有事にて、かく三方より吾国を併呑セむと窺ふ事、広信の眼より見れば、実に明鏡にうつすが如く思ふ。

太平に武を忘れるべ  
からず

然るを大艦、大炮など、うろたへさめくは、賊を捕へて縄をなふ譬の如き世なりけれハ、よくく己をしりて、武備嚴重になしたまふへし。

林子平の言うごとく、  
海防は重要

太平に武を忘れざるハ兵家の教成ハ、海岸の国ハ元より内地の国といへとも、常に武備嚴重になさずむは有へからず。実に林子平のいへることく、江戸日本橋よりアメリカ、ヲロシヤ、イギリス其他諸国ハ境なしの水路にて、火輪船にて来れハ隣家へ行よりも近き海上なれハ、国家を思ふ士ハ努々武を弛ふべからず。

己が身を固め軍用に  
立つべきこと

当世の人情は己のこ  
とのみで、国家を思  
わぬ穢き心

當時上ハ知らず、諸国下々の人情を聞二、千代田問答に云へる如く、千石以下の士ハ、譜代の家臣を持たるもの稀にて、多くは雇人なれハ、命がけの場合になりては、皆逃走るへし。さすれハ残るものハ主人と馬のミならむ。又其主人といふも戦国に生れたる人の如く、幼より耳に大炮、矢さけびの声を聞たる人にあらて、たゞ酒色におほれたる懦弱の身に着なれさる甲冑、兵具を固めて陳營（陣か）にあり、常に喰ひ馴ぬ飢食をなして、雨露杯に当りなハ、あはれ忽ち病者と成ならむ。かゝる人も治世にハ、己が高禄（頭注による）を面に顕し、雇人に槍を持てひろき道をも挟しと往来し、己より下なるものを小臣ものとあなどり見下すハ、彼を知りて己を知らざる人とはいはむ。忠臣武功ハ禄の多少によらざるもの也。近ハ浅野家の義士を見てもしるへし。

古は二三百の士にても譜代の家臣有しと見ゆ。然るを当時ハ年三兩の雇ひ士も抱へず、先祖より伝来の武器も失ふ程の困窮なるハ、何なるゆへなるや。此皆国恩を忘れて己か身の奢りによりてなり。故に高禄を食むものハ、おのれが身を固め軍用に立へき事、專一にすへし。

又上下おしなへて今の世の人情は、昼夜酒色におほれ、或ハ珍らしき草木鳥類器物を翫ひ、或は居室或は衣類等を飾り杯、唯己が身体をのミ嘉はし杯して、国家の為を思はざるきたなき心はいか成人面獸心とは、かゝる人をやいふならむ。今眼前にかく大患のある世成ハ、二百余年飽まで喰ひ温二着、枕を高ふして腹鼓をうちたる国恩を思はず、武を忘れ心を弛め居る人々は、実に国賊といふへし。異船浦賀へ来りしと聞たる時ハ、聊武き心に成る人も、又退船と聞ハ忽ち心弛て、武を忘るゝ人多かりしも、今ハ異船渡来も珍らしからずとて、酒席の戯話と成てかゝる事とも心付さるハ、実になげかはしき事共也。

本書で地理学を知り、  
武を忘れるべからず

天つ神、国つ神、曠  
きて、天変地異を  
もって知らせ給う

ゆめゆめ武を弛める  
べからず

地理、防御の書を取  
集し、米英魯を研究

栄力丸漂流民に異国  
事情を聞き質し、本  
書を編む

此、皆地理学をしらざる故成ハ、此書を見て武を忘るへからず。又明たる人ハよく人情を知りて武を嚴重になし給ふへし。

故天つ神、国つ神もなけき給ひて、近年は恐れ多くも禁中並に江戸両丸も二三度も御炎上なり。又下たるもの二もさとし給はむとて、諸国飢饉つゝき、其上飲水も乏しき程の旱魃、又昨年は諸国大地震等の天変地妖をなさしめ給ひて知らせ給ひつれとも、ゆめうつゝにて心付されハ、此上ハ又いか成天変地妖を以て知らせ給ふも計りかたし。されと中々大炮の音を聞されは努うつゝ、よもさめましと思ふなり。

飢饉旱魃地震等ハ天地の常也忤思ふ人もあらむ。実に恐るへし、謹むべし。異船打払ハ近きニあるべく思ふ也。夢々武を弛へからず。

広信は朝食て夕ハ烟たゆるはかりの小臣にて、居室ハ素より身にハ破布をまとふといへ共、耳目にふれ力に及ふかぎりハ、地理防禦の書籍を集めて、国家の為に学をなさむとしか思ひつれども、素より無識無智にて愚昧の性質成は、志有て其用をなさず。されといさ、か国恩の万一をも報せむとて、拙き筆もてアメリカ「イギリス」ヲロシヤ、この三国の治乱、盛衰、武備、人情等を諸書の説を輯正して海防の一助ともなさむものと志を起して、やゝアメリカ風土記を七八分かきたる比、当国の舟人アメリカより帰朝せしとて、去十二月町宿に泊りぬ。

吾行て異国の事とも聞つるに、国家の爲となるべき説どもいと多かりければ、こハ委しく聞正さむと思ひて、明る正月大旨をきくに、丑の六月浦賀へ来りしベルリ」の乗居たる軍艦に二年許も居て、何事も委しく知りたるよしなれば、こわ詳に聞正しなは実に彼を知る助ともならむものかとし

か思ひ發して、今年の四月の末より吾茅屋に呼、業の暇毎に質問なして、吾教子信胤に筆とらしめて、五月の末までに書終ぬ。

本書を訂正し、諸説を加える

されと無識成漂民成ハ、書取かたきことも其俚記し、又前後したる事をも多かりければ、六月の始より再び聞正して、同月末に書終りぬ。又七月ハ参考、追考となすべき引証をただし、翌八月本章ニ諸説を加へ、同月末にかき終りき。草稿のまゝなれハ、語格ハ元より誤字脱字も多かりけめと、再び正さむも其暇なけれハ、見る人其心して読給ふへし。

国家のために本書の  
批正を乞う

されと非なる説もいと多くありて、博学多智の大人たちハ定めて陰にて笑ひ給ふべく思ふなり。笑ハゞ笑へ、譏らハそしれ。広信ハ国家を思ひ罪を顧ミず、思ふまゝを記して自非なる事をしらず。故国家を思ひて吾説の非なることを笑ひ玉ハゞ、其由物に記して吾許に贈り給ハむ事を願ふなり。此通に君を思ふ誠忠より出たる成ハ、筆談にて其是非を正し、国家の為に広く万人にしらせまほしく思ふ也。必不忠の士、陰にて笑ひそしるへからず。

如はいふは姫路を所知看  
酒井の君に世々仕奉る

一色見龍源広信

凡例

凡例

一凡て此書の草稿十二卷あり。全部成就して後世ニ出すべきを、師の本業いとまなくてはたし玉ハぬを、此処コ、カ、シ彼処よりせちにこふ人のおほきにも否あへ玉ハす、草稿のまゝなる六卷をしるさしめ

られたれは、非説ヒガコトもさこそ多からめ。

一 吾師の友秋元安民大人考へ得たる説有とて、書かへん事を乞たまふ。こハ安民曰と標して、諸説二別つ。

一 図中、義胤とするせるハ、師の友成る森田主也。其余無名成ハ、清太郎かミづから図したる也。  
一 引証数百卷書名をあぐるも煩しくてしるし玉ハず。たゞし万太郎（次カ）いふとするされたるハ、難船人  
帰朝紀事万次郎話説、万次郎雑話、万次郎漂流噺、漂流瑣談（詳カ）等の書二見えたる説とも也。亥之介  
いふ、弥市いふとするされたるハ、彼等の漂流記二出たる説とも也。

菅生信胤

しるす

\*ヨーロッパ、アフリカ、アジア、ロシア、アメリカの絵図あり（略）

東西異聞卷之一

栄力丸乗組員・十六  
人乗り

東西異聞卷之一

撰津国菟原郡大石村松屋八三郎持船千六百石積、船名ハ栄力丸と云。積荷酒、砂糖、荒物にて、  
其乗人は、

播磨国加古郡古宮組宮西村 沖船頭 万蔵 歳五十八

撰津国八部郡神戸 柁卒 長助 歳五十一

播磨国加古郡古宮組宮西村 水主 安太郎 歳二十九

|              |    |      |      |
|--------------|----|------|------|
| 同国同郡同組西本庄村   | 水主 | 浅右衛門 | 歳三十四 |
| 同            | 水主 | 甚八   | 歳二十八 |
| 同            | 水主 | 清太郎  | 歳二十八 |
| 同            | 水主 | 次作   | 歳二十八 |
| 同            | 水主 | 喜代蔵  | 歳三十三 |
| 伯耆国中村郡長瀬村    | 水主 | 与太郎  | 歳二十七 |
| 紀伊国加茂郡塩津浦    | 水主 | 岩吉   | 歳二十一 |
| 備中国浅口郡勇崎村    | 水主 | 徳兵衛  | 歳三十  |
| 伊予国岩木浦       | 水主 | 民蔵   | 歳二十五 |
| 讃岐国安治浜       | 水主 | 京助   | 歳三十一 |
| 摂津国八部郡神戸     | 水主 | 幾松   | 歳三十八 |
| 安芸国因ノ島の内ムクノ浦 | 水主 | 亀蔵   | 歳二十二 |
| 同国瀬戸田        | 炊  | 仙太郎  | 歳二十六 |
| 都合十六人乗にて     |    |      |      |

漂流後の乗組員（概略）

広信、漂流民の説話を詳に聞に、万蔵ハ「ヲウアイヒ」にて病死す。次作、亀蔵は唐国の金星より亜墨利加に往て「サンプランシ、コー」に住す。仙太郎ハ上海より異船ニ乗りて丑の六月「ヘルリ」と共に浦賀へ来たりける由、聞及へり。又岩吉ハ乍浦にて出奔し、其後亀蔵と

共二重墨利加船に乗て去寅年下田へ上陸したる由、風聞あり。安太郎ハ肥前の樺島にて病死す。京助も長崎にて病死す。自余九人は五ヶ年目二めてたく帰国をなしたり。猶くはしき事は下の条々に記せるを見るへし。

栄力丸、神戸を出帆

嘉永三庚戌歳九月十五日津の国神戸を開帆す。同十九日雨風烈しければ、紀伊国大島に繋りて風を待、同廿一日巳の刻頃其処を開帆し、翌廿二日また風悪けれハ止事なく同国九鬼浦二かゝりぬ。

此処二十月六日迄船かゝりして、翌七日海面穏かなれハとて出船しけれ共、又々風波悪しくなりけれハ、翌八日志摩国安乗の浦二繋りぬ。此処に五日滞船して十二日の朝発船す。同十五日相模（頭注による）国浦賀に着船し即御番所ニて御改を受、翌十六日此処を開帆し、同十八日ニは江戸ニ着船したりける。

江戸で荷揚げ。浦賀に向かう

霊岸島成る中西新八郎の方へ荷ヲ上はて、同家ニて紅花十三箇、麻五箇、小箱一ツ積入、同廿二日江戸を出帆して、翌廿三日相模（頭注による）国浦賀ニ入津し、宮原屋より小豆二百俵、大豆百八十俵積入、

浦賀で彦太郎を乗せ、十七人乗りとなる

此処ニて播磨国古宮組東本庄村彦太郎といふもの、年十五ニて船主八三郎の一門成る松屋又左衛門持船住吉丸の乗人もけるを、炊役カシキの仙太郎病氣成故此童を雇ひ、

此彦太郎ハ唐国の金星カミサモより亀藏、次作と共に再亞米利加へ往たり。

都合十七人乗ニて、同月廿六日此処を開帆せしニ、

熊野沖辺りで強風に見舞われる

同月廿九日夜四時頃熊野沖とも思しき辺ニて、俄二東風烈しく吹發り、西の方へ五十里斗り颯りつ、翌晦日の朝四方を遙ニ眺望ノゾムとも小島一ツたに見へす。されども只管西の方を志して颯りぬ。

一同談合の上、帆柱を切り捨てて

一同髪を切り、神仏に祈る

栄力丸、漂流船となる

船に出合うが、波風荒く行き過ぎる

北風、西風に翻弄される

其日八ツ時頃北風高浪を揚るニ、浪五六尺許も入りて楫をさへ損し、酷苦言斗なく皆家命危く成りけれハ、今はいかゞセむ、櫓を断すてずハ倏忽覆りなんも量り難し。然とも先伊勢大神宮の御鬘を取てこそともかくも定むへけれどとて御鬘を取けるに、切るなどあり、こはいかに神罰恐れあるものから切すハ愈危かるへきをとて、船中一統商量の上ちからなく櫓杆を切捨てたり。

十七人の者共も髪を切坏して神仏を祈り、船の表ニ四角又ニ挺釣り友流れにしつゝ、赤小豆六七十俵許剥浅したり。

斯て翌十一月朔日寅の刻頃南方ニそ吹変りける。神の諭しハ小縁ならず。昨日若櫓を切棄さりせバ、この良風ニ帆を張て忽北方へ着ましをと皆々後悔成しけれど、今更ニすべもなく、小柱を立四角又を巻上て子の方へ颯り、夜ハ明ながらまた暗きに南の方を望ミ見れハ、遙の沖に小島の如く船一艘見えたり。

此船、櫓竿を切捨てざる故、子の刻頃にハ吾船に近づき、西の方一里許隔て、吾船並ひけれハ、此方より皆々標をあげて助くれよと招きけれとも、さばかりの大洋ニ浪風さへ暴けれハ、何てか心ニ任すべき吾船を顧ずして子の方へ颯り抜、申の刻頃ニ島のこくと遙ニなり、日暮には其船見えすなりぬ。

さて子丑の方ニ小島山ミゆるハ態野山ならんと喜びて、其夜四ツ時頃まで北をさして颯り往しか、俄ニ北風烈しくなりて、百里許も地方より南へ吹流されぬ。かくて明る二日の朝、西風に変り東ニ流され、其日の夕ベ十里許東ニ小島ミえたり。人々歎ひ、非除人のなき島なり共、いかて此島へ上らばやと思ひ東へと志したりしか、其夜七ツ時頃子の方に火の光りミゆ。拳船歎ふこと限なし。

夜明て見れハ昨日見し小島ハ戌亥の方に成りて、其島の東ニ柱切たる類船一艘ミえたり。夜地方の火と思ひたりしハ、此船の火ニこそ有けめ。

青ヶ島を見るが、強風で近寄れず

其日四ツ時頃亥子の方に山三ツニ見ゆる島有。予て聞しに八丈の島ハ何処より見ても山三ツニ見ゆる島なりと。さて此日見し島は青ヶ島にて、八丈より十八里午未の方に当る島成は、弥々上らまほしく思ひすれとも、牙櫓もなく原来風も西風にてより付難て、其日の暮より北風にさへ変りければ、ともに工夫をなして本棟を柱に立、橋船の柱に表櫓を括り添へ面帆を拵へて半卷上ヶ表に中帆を卷き艫にも小帆をまきて西の方へ颯るニ、風も亥の方より西の方へ廻りけれハ、船を廻し丑の方へ向ひて吾国へ帰らんと思ひしニ、四日の朝又風大西ニ変り、此日見し八丈島、青ヶ島ならんと思ひし島もミえずそなりぬる。

強風に翻弄され、ひたすら神仏に祈る

挨拶は未申へ颯りぬ。此船ハ吾輩帰朝の節長崎にて聞ハ、明年（頭注による）四月土佐国へ帰りたりと。さて五日の朝ハ風尚々烈しくて、良浪の為ニ船桅折損じて四五尺も浪入ければ、我等衣類を破りて浪の場留めをなし、其場を凌ぎたりしが、猶東へと流れ行きぬ。同月十四日更ニ東風に變り、地方へ十七八日頃迄颯りて船も沈まん許也けれハ、共ニ魚腹に葬れん事も如此成上ハせんかたなければ、さすが親を慕ひ吾を待らん妻子を思ひ、只顧神仏に願ひをかけて涕泣する外又他事なし。

大西風、大時化に見舞われる

かくて十八日頃より復大西ニ變り東へのミ流行たり。猶廿五六日頃も大連陰にて船覆らんとせしかバ、神仏を祈りて、身体の労るも厭はず浪を汲捨凌ぎ居たりしが、神仏の冥助にや有けん、辛くして雨風も鎮りけるが、廿九日ニ至りてハ雨風更ニ甚、如何ハせんとして幌巾にて抹額す。万蔵、長助ハ残髪を切捨て今ハの時に水涸ぐべき準備ヲなし、迭に此世の別とて告別して神仏を祈りて泣

味噌、醬油も尽きる

居たりしか、漸晦日の正午と思しき頃、大風大雨止ミたりけり。聊人心ニ復りたれど小島の類だにミえされバ、心細き事いはん方なし。

此来は味噌醬油も絶はてたれど、水は雨水を受けて細き性命は続きぬ。又雨水なき時のためとて、桶或ハ鍋にて潮を煮て真水を取抔したりき。

追考

追考

潮水から真水を得る方法

平天儀図解に曰、釜の中に潮を入れ釜の蓋と桶の底に穴をあけ、廻り三四寸、長さ五六寸の竹をさしこむ。尤桶の内へ五六歩許ぬき出し置、右桶の底の脇へ細竹のからを能く通して指込、又下二桶を受置バ、此細竹へ真水下るなり。又上の桶の蓋にハ鍋に潮を入置、図の如く下より焚也。右鍋の潮温まれハ何返も替べし。然なくては真水下流事すくなし。如斯すれば、凡潮水を一斗にて真水五杯を得るなりといへり。

又同書に、潮にて食を焚くにハ、先前日より米を潮にて能洗ひ潮ニ漬置、焚んと思ふ時分二いかきへ上げ、其ま、桶二入れ、

潮水で飯を炊く方法  
(『平天儀図解』)

\*潮水より真水を取る絵あり(略)

能ふたを仕て、右桶の下細竹をぬき穴をとくとつめ置て焚べし。食常の如くにして潮はゆき事なし。此法は熊野の喜多元通といふ人の文に、橘南谿先生の奥書有一枚摺のものを書写して、爰に録するものなりと云り。

潮水で飯を炊く方法  
(『武備要略』)

又武備要略に、船軍にて水は兵糧ロウと同じく大切ニ為べきものなり。兵糧有といへ共、水なき時ハ何の用にも立ぬもの也。若船中にて真水マなき時ハ、潮水を以て常のごとく飯を焚く事、船軍の秘事也。先白米を潮水にて能々洗ひ、鍋の底に大土器をふせ、其上ニ早稲ワセワラ藁を四五寸許に切り、厚さ一寸許に鋪シキき、其上ニ米を置き居恒ツチより潮水を多く入れ、少し煮立たる時、又早稲藁を四五寸二切りて薄く並へ置き、飯になる迄藁ワラを三度並べかゆへし。如斯すれハ真水にて炊にる食に変わる事なし。故に船中にては大土器、早稲藁等多く船底ニ入置べき事肝要也とあり。

此は世の人能知給ふ事ならめど、清太郎かくなせしといふに能く似たる事なれば、船中心得の為、此に記す。

いよいよ最期と覚悟  
をさめる

然て翌十二月六日大連陰にて再び船覆らんとす。いかゞはせん十月晦日タ、ヨヒより漂蕩初、しはすの頃ニ至る迄、夜昼となく艀縫フナワサにいたく力を尽しにけれハ、統て病人の如くニなりはて、あさましきまで疲勞ツカレつ、働く事なりかたければ、今回ハ越最期コタビイヨクナキナチぞと思ひて覚悟を極め居たりしが、猶神仏の幫助タスケにや翌七日の正午とも思しき頃、雨風や、止ミたり。

鰯が現れ神の恵みと  
喜ぶ

さて十日頃と思しき日、傍りに多くの鰯シイナ見えたり。歎ひてだましといふ物にて、二三尺許なるを五六十釣得たれども、塩なければ久く貯タケワふる事成かたく、薄く批ツカぎて干拭したりき。偏ニ神の恵ミニコそと、

皇国の方を伏拝ミたり。

参校

参校

鰯で命がらえた話

今卯年を去る事十一年前、亜米利加より帰朝せし兵庫の中村屋持船永寿丸、天保十二年辛丑

大時化が続く

の八月より漂流して米水欠て後、大洋にて大鱈を一尾得たるを、十三人のもの共長く飢<sup>キ</sup>□<sup>カツ</sup>（渴か）に逢ひたる時成は、腸<sup>ハラワタ</sup>は元より骨迄も焼き焦<sup>コガ</sup>して、十日計の食物として命を續きたりとなむ。此偏に神の冥助にて、今鱈を得たるに能く符合すれハ斯<sup>カ</sup>ニ記ス。

又十一日も大時化<sup>ジケ</sup>にてからきめを見たりき。こゝにいと怪しかりしハ、鴉<sup>カモメ</sup>に似たる鳥一群、日毎に船の上を飛廻る。神々こそおハすらめとて拝<sup>イ</sup>ミ居たりしか、其後ハ鳥も見えずなりぬれハ、弥々北方遠き海へ来るにこそあらめと、さては神も見放<sup>ハナ</sup>ち賜ひたるにやと、泣悲みて生たる心地ぞなかりける。

渺々たる大海に塵ひとつ見えず

如斯<sup>ビヨウク</sup>渺々たる大洋にては一片の塵芥だに見る事なく、悽愴<sup>モノスゴキ</sup>事譬へん方なし。又十五日も大連陰<sup>ジケ</sup>にて東へ飛事<sup>アタカ</sup>恰も矢を射<sup>イ</sup>るごとく、滄<sup>アカ</sup>も五六尺許入れバ生たる心地セざりしか、這回も神仏の御かげにて漸雨風止ミければ歎<sup>イ</sup>ひ居たりしに、又十九日も大時化ニそなりぬ。さて這回は少しの間なれ共、是迄の大時化よりも烈しき事十倍なれば、何れも今は海へ飛込用意をなし、今日を限りの命と思ひ 皇国と思ふ方を伏し拝ミ、親あるものは親を思ひ、子あるものは子を思ひて、流る、船の碎るを今や／＼と心ならずも待居たり。

大時化の度に命無きものと覚悟

扱、大浪船の表を打碎きぬれハ、弥必死を極めしに、神仏の御かげか浪風は治りけり。さて是迄八九回の大連陰にて、度毎ニ命はなきものと思ひしかとも、若や神仏の御蔭にて小島にても見セ給ハ、ゆきつきて命許ハ助からむものと思ひ、其時の準備<sup>ヨウイ</sup>ニ藁<sup>フクロ</sup>或ハ繻<sup>ジュバン</sup>絆<sup>バン</sup>などニ米升極づ、包ミ夜ハ枕辺ニ置き、昼は目の及ふかぎり島を覓<sup>モト</sup>むとも、八丈島ならんと思ひしくなりぬ。鷗<sup>本ノマ</sup>ヲ見し外は流れ寄来る塵芥たニなし。まして船坏あらましや。

安民曰、八九回の連陰ニ遇て今はよも叶ハじと思ふニも、猶從容つくりけむ水手等の心こそゆゑ、しけれ。諸葛亮の心書に、軍井未<sup>ズ</sup>汲<sup>ク</sup>將不<sup>レ</sup>言<sup>カ</sup>渴<sup>ツ</sup>軍食未<sup>レ</sup>熟<sup>ジ</sup>將不<sup>レ</sup>言<sup>カ</sup>餓<sup>ウ</sup>軍火未<sup>レ</sup>燃<sup>モ</sup>將不<sup>レ</sup>言<sup>カ</sup>寒<sup>バク</sup>軍幕未<sup>レ</sup>施<sup>コ</sup>將不<sup>レ</sup>言<sup>コ</sup>困<sup>コ</sup>と云々、將略も何かハこれに過ることあらん。

旧里の事のミ思ひつゞけ漫ろに泣て居たりしか、廿一日早天に安太郎一人船舷<sup>フナバタ</sup>に出て、若し島もやあると西の方を見けれバ、城のとき白きもの遙<sup>ナ</sup>とミえけるハ、大声<sup>ゴ</sup>ニて船中のもの共を起しけれバ、皆飛起て西の方をミけれハ、三里許り外ニ、云しかごとく城の如き白きものミえたり。何れも地方ならんと思ひ遺魂<sup>イキカヘリ</sup>たる心地ニて延揚<sup>ナガ</sup>ニ眺め居たりけるが、漸く近くなりて始て唐国船の白き檣なる事しられたり。

唐国船に声の限り助けを求める

炊役の仙太郎は手早く飯を焚く。其外若もの等ハ脚船<sup>テンマ</sup>を卸し、或ハ手風呂鋪、手拭杯おのがむきくうれしさの余り狼狽<sup>ウロク</sup>まはりて手招きし、幫助<sup>タス</sup>け呉よと、声のかぎりおめきさげびて待いたりけれバ、彼の船ハ北の方へ行過<sup>ス</sup>ぎて、吾船を手招きす。猶も幫助や呉ると歎ひ、兎角する内、かの唐船は辰巳の方へ行過きぬ。

さては吾船を見捨けるよなと思ひ、十七人のもの等一回ハよろこびしか、今ハ力も落はて、せんすべなくて居たりしが、暫ありて唐船は吾船に輪をかくのごとく少し前へ廻舳<sup>コキモトシ</sup>、吾船に三丁許近寄り帆を二つ残し、帆を皆巻て船の動揺<sup>ユルカ</sup>ぬやうになし、手をもて招しにぞ、取物も取敢ず脚船に取乗、唐船の船腹<sup>フナハラ</sup>まで漕<sup>コギ</sup>よせたりける。

さて唐船より纜<sup>トモナ</sup>を卸せし故、其綱にて橋船を唐船に括<sup>ク</sup>り付、皆其船に乘移りぬ。此時周章<sup>スハダ</sup>持たるものとてハ、今朝炊たる飯櫃一ツのミなりき。

小舟で移動、唐国船に乗り移る

イギリスの海賊船かと心配する

唐人、日本人かと尋ねる

扱、此船ニ乗移りて見けれハ 皇朝の人とハ酷異なり、百会は蓬髮、衣類ハ牡丹付也。異容なる風俗成は皆々驚き端緒に小くなり、固り居て互ニ耳語、此ハ貌利太泥亜の抽傍にて、吾々を殺して衣類など掠奪ふ事もやあらんと、戦慄おのゝき居たりけれハ、異船の乗組は十一人にて其内の一人に辮髮なるものあり。

此者、吾等が寄集りたる所へ来り、紙に日本人と書て見せし故、十七人のものども日本人かと尋る事ならめと思ひ、皆々日本人なりと領きけれハ、芥子坊ハ曉りけるニヤ、蓬髮人の許へ行き何角悄語けれとも、言語異成は此方へハ通せず。かくて何角談合して居けるが、唐船ハ吾本船の真西へ廻るハ、異人吾船の荷物を取移さんの心にやとゝかがひ居けるニ、靜なりし波も啼地荒くなりて、吾乗捨し船の真北へ廻りし頃、今乗捨し橋船も親と頼ミし栄力丸も遙ニ遠くぞ漂蕩ゆきける。積置たる米少しも得て吾食物にと思へと、如此洵々たる逆浪の中にて、更ニ近寄る事叶はず。

乗り捨てた栄力丸、遠くへ流される

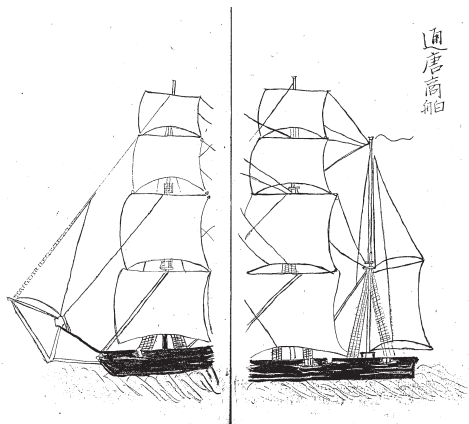
力なく本船を見捨、寅卯の方へ颯りつ、かへり見れハ、いとも幽かになん成にける。或時ハ波濤にゆられ、或時暴風ニ吹きまよハされ、浪を捨て、柱を切り、千辛万苦に月日を経て、危き命を助かりし船にしもありけれハ、親ニ別るゝ心地して伏拝ミ居たるほどこそあれ、船ハ見へすぞなりにける。悲しき事言はん方なし。

栄力丸に残した猫を思い遣る

さて何ばかり堅固なる船にても、大波を防ぎ或ハ浪を汲出し艀縫に力を用ひ坏、種々にあやつりてこそ

### \*「碇」の絵あり（略）

通唐商船



通唐商船

破碎せざるものなれ、人乗居られハ忽船は沈むものなり。此時のあわたしさに、長々馴まつはりし猫をも乗捨て来つるが、唐船に乗り移りたる時、猫は船舷に出ていと哀氣ニ泣居たりしが、必定今ハはや積荷と共に千尋の底にや沈みぬらんと思ひやられて身にしむはかり悲しかりき。

愚按するニ、如斯捨身ニ及ぶ船中にして猫を養ひ置る事よと不審思ふ人も有へけれど、船中の猫は、馬頭入津の時杯上陸して人少なる二なる時ハ、船舷ニ出ていと哀れ氣二人をこがれ、能従ふものなりと。故ニ餓死せしむるに忍びず、猶こゝ迄も如斯飼置と也。

夕食はパン

さて此船ニ乗移りて、午飯ハ吾船より持運びし飯を握て十七人の者へ配分して喰ひ、又夕食は煎餅の形にて厚さ四分許、大さ四寸許なる蒸餅といふ物を籠に入れ、五十許吾方へ呉れぬ。味は甘味もなく塩氣もなく、小麦の粉の団飯を焼たるやうの味にて、好きものにハあらねども夕食となし、跡二十枚許残りしを吾持行ける飯櫃ニ入置つ。

環海異聞ニ、麦粉を「ケレブ」「長崎にてハ「パン」といふもの也。和蘭ハ「フロード」といふ也。」是常食にして、裸麦の粉を蒸餅にしたるものと云り。

船中の寢床

パンの量多いと断り、のち空腹に苦しむ

飲み水の不足に大いに苦しむ

己を犠牲にする異人の人情を感じ、渴きを辛抱する

さて其夜の囲房ハ重ね置たる脚船テンマを拜ミ合せとなし、此へ這入ハて寝よと雑手伎テジナしける故に、片角より這入ハども十七人は入難く、十一人這入押鮮ワシスシのこたく二なりて寝たり。残り六人は、艫の下ハの帆を入たる一畳鋪許デウの所へ、六人逼合セリアヒて夜を明しぬ。

翌廿二日朝五ツ時頃と夕七ツ時頃と、又蒸餅ハンを五十程づゝ、両度もらひしかと、味ひよからぬものゆへ、其日も二十許余りし故、四五日も過ぎたれハ追々ニ余り多きゆへ、手を振ハりて入らぬと断りければ、其翌日より日に一度五十枚より呉れすなりしかは、後ニハ空腹ニ成りて皆々大ニ窮き。

又水ハ俄ニ吾等十七人も乗込ける故、乏しくや成けん、茶碗を以て十七人へ日々一杯づゝ、飲し呉よと、雑手伎をなして請ひけれハ、異人とも両の目を閉トヂて横に外し、かくてハ船中のもの共一統に死すると云仕形を成て、水ハ少しも与へず。されども四五日も過は必定島にも着船する事あらんかと辛抱シンバウしたれとも、幾日経ても島も見えず、小便ハ濃茶のこたくにして、聊チヤウよりは出ず。後便グイベツハ十日も十四五日も出ずして、腹ハ石の如くに脹り、咽ハいたく乾きたる上、蒸餅ハンハもとより水気なきもの成ハ、咽越アルキし難く誠ニ困厄事の極となりき。

かくて日経るまゝ、ニ船中の案内をしりて、さかしきものハ、船中ニ水貯へ置ける樽十斗り有けるを、夜にまぎれ上の詰ツメをぬき帨巾テヌグイを穴よりさげ絞シボり盗ミ吸ひ舐シして漸々渴をうるほし、又造化シアハセよきものは水を茶碗に半分許り隠しもらひたるものあり。

然れ共吾々のミにもあらず。異人も水はミだりに飲ず。其上食物とても十一人の用意の処へ思はさりける洋中にて

\* 「吸水管」「水樽」の絵あり（略）

俄ニ過倍クワバイの乗組し事成ハ、うべ然もありなん。無下に心なきものならましハ、如此己を苦しめて人を助くる事あらましヤ。情を感じて、其後ハ皆渴をも忍ひて辛抱をなしたり。

異国の人情ニ心を留めて下の条々を見るへし。此海防武備の助ともならんか。

異国の言葉分からず、行き先も分からず

言語は別らされ共、必定唐国近き海ニて三四日の内ニは地方へ着く事ならんと、容子を伺ひ歛ケシボウ待てとも、然はなく八九日行ても小島だに見えず。心細く何成国へ行事ならんと不審思ひ居けれハ、辮髪、紙に金山門と書たるを吾方へ示セリ。何といふ事共別らされハ、是は神の御札にてもやあらんと思ひ拝ミけれハ、彼方ニは笑ひたれ共、何故ならんと思ひ居たりしが、後ニ北亞米里加の「サンフランシ、コー」といふ金坑カナヤマの馬頭ミナトへ着船したりし時、金山門と示しけるハ此処の事ならんと思ひしられたり。

送状、砂糖、茶、小麦粉、中華国虎門出帆、道光三十年十一月とか書たる物を見せたり。文字しらぬ身ニは定かなる事は記し得ざれども、中華と道光とをさへ何事とも得しらざりき。

サンフランシスコに着船、アメリカ船と知る

さて助命られたる船を唐国の船なりとのミ思ひ居たりしが、着船の後、聞ければ亞米利加船ニて乗組は十一人、其内一人は唐人、二人は魯西亞人、自余八人は或は亞米利加、或ハ伊祇利須等のとなりき。船主は亞米利加の人にて、名ハ「キヤテン」、魯西亞人名ハ「チャレイ」、亞米里加人名は「パクマイ」、炊役は唐人ニて名ハ「マスキチ」、給仕人は魯西亞人にて名ハ「タメス」、其余六人は亞米利加、或ハ英吉利須杯の人成ども、名は聞かず。

アメリカ船の大きさ、  
装備など

船の長さ拾四五間、横幅三間、帆の数十三、枝船<sup>テンマ</sup>二艘、二貫五百目位石火矢一挺、其外小筒四五挺見受たり。其外武者のものと見当らず。

積荷は「サンフランシ、コー」にて荷上ケの時見れハ、砂糖、茶、小麦粉三品のミにて、船の大きさ九百石積許の物なりき。

又此船にて食物と思しき物貯へたるハ、豚<sup>ブタ</sup>五六疋、雁七八羽、塩牛、塩豚、蒸餅<sup>シメツ</sup>等、豆、小麦粉、砂糖、其外二も有げ成ともくはしくは得しらず。

食事は三度。船長の  
朝食

食事ハ三度。大将分の食物、朝ハ小麦粉を焼たる物にて、其製造は小麦の粉を昨日水にて練り置たるを、今日新たに練りたる内へ少し入、よく練合せて鉄の真四角成器<sup>カステラ</sup>二入れて焼きければ、鶏蛋糕<sup>カステラ</sup>のこたく中巢<sup>カステラ</sup>なりたるを小口切<sup>カステラ</sup>二なし、豕の油ヲ附て朝の食物二なす也。

追考

追考

『環海異聞』に見る  
パンの製法

環海異聞ニ「ケレブ」「蒸餅」の製法は、定法の品ニ麦の粉を水ニ和し練り<sup>チカラ</sup>捏して餅となし、蒸焼きニするものなり。其内焼かすみて捏しかためたるもの二日三日残し貯へ置、日を経、味変するを待ちて取出し焼きて少し食ひ試るニ、稍酸味を生ずる也。此酢味出来たるを以て数多製するたねとす。

扨「ケレブ」を作らんとするニハ、麦の粉をぬるミ湯<sup>ユ</sup>にてまぜ合せて、其内へ右の酸味出来たる餅塊<sup>モチ</sup>を細かに砕きて、是を和しかきまはし、ねせ置、其時刻の定限ありて涌立<sup>ワキ</sup>なり。又是を能くかき廻し、又別に水と粉とを増し加、其程ハ捏して餅と成度を得る也。則此を取、餅二作、大小ハ心任せニする也。其大小塊を竈<sup>カマド</sup>の内ニ鋪て有焼瓦の上へ並て蒸焼と成也、とミえた

り。

又哉食ハ塩漬の牛を潮水にて焚きたる也。又芋をあられのことく刻ミ小麦の粉にて練り塊め、皿に盛りて竈ニ入れ蒸焼となし、此をも添食う。

追考

追考

異人は獣肉を、日本人は神の米を食す

丑六月亜米利加軍艦浦賀へ入津の時、香山某、訳語人某ニ、世話ニ成とて牛の塩漬一箱、牛肉二十切づ、送たり、と異船実聞記ニもありて、異人は獣肉を好ミて喰ひ、皇国人は此を禁し嫌ひて御神の作り給ふ米穀を食す故ニ、獣肉より成ける獣心の異人と、米穀より成れる

皇国人とは自ら優劣ある理を悟りて、皇国のために忠をつくし、ゆめく異国を慕ふへからず。

昼食

又午（頭注による）飯は豆ニ塩牛を入れて焚き、又朝飯と同じき鶏蛋糕のことく成る物をも喰ひ、又

折ニは米を煮て喰ふ事もありき。此はいとまれにして余り好まざる容子なり。

米の説は下条に委く記す。

夕食

又夕食ハ大体同容成ども「スツプウ」といひて米を少し入れ、また塩と豚の油を少し入れ、汁のことく薄塩梅にして飲む日もあり。また七日目くニは「サンデイ」といひて、豚或ハ雁杯を食ふ也。

「サンデイ」のことは下ニ詳密ニ云へし。

船員等の食べ物

又跟随等の食物は漂流人の喰ふ蒸餅を煮て密（蜜か）砂糖をかけ、或ハ豚の油杯かけて食ふ。莫様の物は塩牛を少しつ、もらひ食ふ也。

異人のなり・服装

又人物は背高く、鼻筋通り色白く、髪ハ蓬髪（ザンギリ）にて頭巾を冠り、衣服は筒袖襦袢容成物ニ牡丹を付、足は股引やうの物をはき、履物ハ沓なり。

寢床

測量器

追考

測量のこと

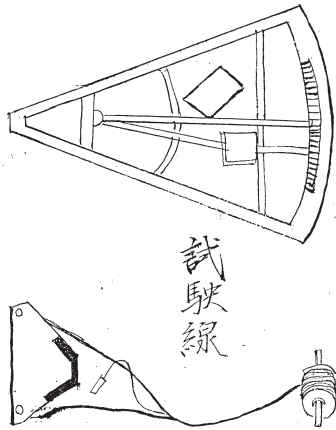
「サンフランシスコ」の服と同様成ハ、此にハ見受たるのミをいふ。猶詳密事ハ下ニいふべし。

夜の囲房ハ舟の傍に棚あり。其内へ入て寝る也。

また扇の形のことき物に眼鏡の玉の如き物を附たる測量器にて、朝ハ日輪ニ向ひ船の南北へ寄たる度数をはかり、又午の刻には舟の行たる里数を量り、夕陽ニハ又朝の如く度数を測り、さて測りし時何やらん大声にて言へハ、船主此を一々記すなり。又図ニ記す三角形なる器のイ印木をさして海中へ流し、吾日本一時の四分一を「グワンアオリ」といひて、時計に合して其間流し糸を強く引けハ、イ印の木抜る也。其時糸を引返して流れたる糸の寸を取り、「グワンアオリ」に何程行るれば、昼夜二十四（頭注による）時にハ何程往なりと云事を測る也。

追考

量天尺



試験線

量天尺・試験線

此測量ニ能く似たるハ、亥之助漂流記ニ、異国船は時々一度つ、糸を流し里程の運びを見る。一日つ、取納メ里程を勘定する事、定例なりと云り。安民曰、この測量器は清人の所謂量天尺なるべし。海島逸史を按するニ、西洋行

舟<sup>フナ</sup>不<sup>ス</sup>專用<sup>ニ</sup>指南<sup>シ</sup>車<sup>シャ</sup>一以<sup>ニ</sup>量<sup>ハ</sup>天<sup>ハ</sup>尺<sup>ハ</sup>一量<sup>ハ</sup>レ之則知<sup>ニ</sup>舟行幾許里<sup>ニ</sup>又能按<sup>レ</sup>図知<sup>ニ</sup>海中沙礁泥濘<sup>シヤウダイチイ</sup>之處<sup>ニ</sup>一  
台<sup>ニ</sup>無<sup>ス</sup>差錯<sup>サ</sup>一其形略似<sup>ニ</sup>紙<sup>ア</sup>簾<sup>フキ</sup>一能開闔有<sup>ニ</sup>一橫尺一斜尺一尺中有<sup>レ</sup>分有<sup>レ</sup>寸俱書<sup>ニ</sup>西洋字<sup>ニ</sup>一每<sup>レ</sup>量必  
於<sup>ニ</sup>午刻日中之際<sup>ニ</sup>其橫者以定<sup>ニ</sup>均平<sup>ニ</sup>其斜者以觀<sup>ニ</sup>道途之遠近海中之淺深<sup>ニ</sup>然明<sup>ニ</sup>其尺量<sup>ニ</sup>而無<sup>ス</sup>  
海<sup>ニ</sup>図<sup>ニ</sup>亦無<sup>ス</sup>益<sup>ニ</sup>於事<sup>ニ</sup>故海<sup>ニ</sup>図<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>体量天尺<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>用<sup>ニ</sup>二者不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>欠<sup>レ</sup>一とあるを以て、今清太郎に示  
すに、一も違ふ処ある事なし。

疲労困憊で目が見え  
ず  
サンフランシスコに  
着船

追考

さて四十日許経て、寅卯の方ニ山ミゆと異人とも云ども、其時ハ漂民等三人の外十四人は、長々  
の疲<sup>ツ</sup>勞<sup>カ</sup>ニて目も見えず、山も更に見えず。それより三日許過て、翌亥年の二月二日とも思ふ日、北  
亜米里加国加里保<sup>カリホルニア</sup>兒<sup>ニ</sup>亜<sup>ニ</sup>の内、「サンフランシ、コー」といふ港に着船ス。

追考

清太郎がアメリカよ  
り持ち帰った地図

四十一二度の地ニて清太郎もらひ帰りし此処の市街の図ニは、「センフランシ、コー」と横  
文字ニ記し有よし成共、諸図ニ此地名見当らず。されど金山「サクラメンテ」と云地名により  
て、万次郎、亥之助、弥市等の漂流記にてほゞ此地解りけれハ、次の卷「サクラメンテ」の条  
ニ委しく記す。

また乙卯の春、仏蘭西船ニて送り来りける三河の勇次郎、作藏等の説話ニ、「サン<sup>フカ</sup>フランシ  
スコ」といふ都ニ至りぬ、此都は近き頃開きたる地成とて二三<sup>（頭注による）</sup>千<sup>（フカ）</sup>人余りニて普請なし。  
都府の「子ウオルク」よりはいと広大ニ成よしへるとなん、或書ニ見へたり。

安民曰、新図を按するニ、北米利堅アルバレ部ニ「シントフランシスタラゲ」とあるは此処  
成へし。

東西異聞卷之一終

東西異聞卷之一終

東西異聞卷之二

東西異聞卷之二

サンフランシスコに  
着船。目も見えず、  
歩行も困難

嘉永三庚戌年の十月晦日より流れ、十二月廿一日異船ニ助られ、大凡九十三日許にして翌二月三日と思ふ日、此亜米里加国の加里保児你亜の内、「サンフランシスコ」の港口に船繋すといへ共、十七人の者等久しく塩気も水も快く飲さるゆへ精力つきて、二三人の外ハ目も見へ難く行歩もなり難し。着船セは水も飲、塩気も喰ふ事ならんと、五六十日前より唯朝暮それのミ待こかれしに、然ハなくて大洋に居し時のまゝなれハ、渴きつよく苦しき事言はん方なし。

或日三人枝船にて船長の上陸を送りける帰に、さハ本船の所在も分らず盲目かきに櫂をかきて船の廻るも知らざれハ、船長ハ笑ひながら自楫とりて漸々本船にぞ帰りける。三人の者ハ今日こそ湿ある食物をもらひ、吾々を待居ならんと互に其日も貰はて苦しき渴をこらへつゝ臥したりき。

積荷を船倉に納める

かくて着船なしてより十日許後、本港に船を入るゝ事を得たるゆへ、始めて積荷を船倉に納るを見て其品も知り、其船の大きさの凡九百石許といふ事も知りぬ。其船倉と云ハ、船の四方に鉄描兎を卸し檣の三ツ続るを上二本はづして、即ち倉となせる也。此港は陸に倉稀にして多くハ船倉なり。故に船倉につむ如く見えたり。

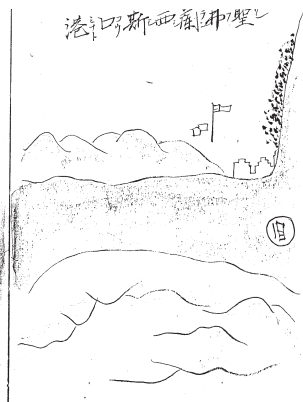
水も塩気も得て生き返る心地する

サンフランシスコのこと

サクラメントのこと

追考

万次郎とサンフランシスコ



サンフランシスコウミナト 聖弗蘭西斯口 港

さて此日より水も飲、塩気も喰ふ事を得て、漸く  
蘇生<sup>ヨミカヘル</sup>心地なんしける。加之、倉船の船主<sup>ヲサ</sup>より剃刀二挺、  
木綿股引<sup>モヘビキ</sup>一足づゝもらひければ、皆々歎ひ不堪へず。  
斯てハ髪を結び股引をはき、上陸せよとならんと思ひ  
居たりしか、さハなくて猶本船にのミ居たりける。

さて本港を見渡すに、三四千石積と思しき船三四百  
艘、中船小船大凡千艘許滞船せり。自外北口<sup>ツノホカ</sup>の「サク  
ラメント」といふ処へ通ふ蒸氣船を始め、出入往來の  
船夥しく繁華なること、目を驚かすばかりなり。馬頭  
口の広さ八十二三丁許、其より本港まで凡一里許、ま  
た向岸へ二十丁許、東ハ幽にして何十里ありや知られ  
す。然れど人家もなきにや船の通もなし。また此の入  
口三十里斗り、奥に「サクラメント」と云て「サンフ  
ランシスコ」にも劣らぬ興旺<sup>ハンジャウ</sup>の地あるよしにて、又其奥に夥しく金<sup>カネ</sup>の出る山ありとぞ。夫故「サ  
クラメント」も興旺<sup>ハンジャウ</sup>し、「サンフランシスコ」も朝夕通ふ川蒸氣船夥しくありて繁花なる由也。

追考

万次郎いふ、共和政治州の「エーシナ」といふ山麓<sup>カナヤ</sup>ニ金坑あり。「キヤレフニヤ」「一本ニキ  
ヤレツメ、又一本ニ「キヤレポ子」と云り。」の大馬頭ニ着す。此港ハ人戸三千許にて商船多

清太郎とサンフランシスコ

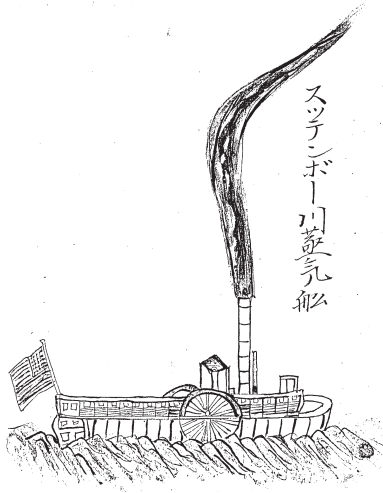
金山門とはカリフォルニアのこと

カリフォルニアの金鉱のこと

く興旺の港なり。夫より川蒸気船二駕し六十里許「一本二百五十里程、日本の七十里程。」往て、「セクリメン」「一本ニ「セクマント」、又一本ニ「セクリメント。」といふ処より入。此処より六十里許「一本百五十里許、皇国の七十里許といへり。」陸を行て、「エーンナ」といふ金坑あり。此所ニ二百里流許成大川三ツありといへり。「セクリメン」ハ「サクラメン」と同音成ハ、同じ金坑にて、「キヤレポ子」の港といふハ、「サンフランシスコ」ならんか。

又清太郎は「サクラメン」迄三十里と異人ニ聞しも、垂米里加の里法成りや、皇国の里法なりや、往かざる故定かならずといふ。又万次郎の六十里といふを垂米里加数とし、清太郎の三十里といふを 皇国の里法とせば、太抵符合す。<sup>（天か）</sup>

又唐人ハ「カラツボナイ」を金山門と書て通するよし、清太郎云り。されハ「カリホルニヤ」



スツテンボー川蒸気船

の大港といふハ「サンフランシスコ」にて、「セクリメン」は「サクラメン」ならんといふもよく符ひぬべし。又東紅海より上りて「エーンナ山」<sup>（ナホ）</sup>の南方なる金坑へ行たるにハあらしか、地位の名称未だ明に分らず。

又此金坑より金銀の夥しく出る事ハ漂洋瑣談ニ、<sup>（サグ）</sup>万次郎、金坑の傭夫たる事三十日許にして、謝銀百八十枚を得て、これを

以て自磁器を買調へ、彼家を出、別に舎を求め、自己の働を以て彼銀坐にうり、一日に銀二十或ハ二十五を得、此に居る事凡七十余日ニして、遂に銀六百枚を得たりといへり。

かの国の銀錢一文ハ 皇国錢一貫二百文に当る。又同書に金を掘事ハ、或ハ巨窟を鑿り入、或ハ川辺にても掘り、凡深さ三四尺許にして多々これを得ると有。又癸丑六月育乃特士迭国統領の奉りける書翰に、合衆国之一省名加理科你亜是大邦土産多海洋出黄金僅四千万両之多同白銀水銀宝玉等物」と記せるハ、全く右の金磁をいへるなるへし。

又永寿丸の船長弥市、弘化元辰年墨是可の「マサタラン」より唐国へ渡海の便船ハ、積荷物ハ金銀の延板一箇目方凡三貫目程づ、有。其箇数一万八百五十箇入とあり。此目方合て三万二千五百五十貫と成。又新国図志ニ、世間日用の物地産に従ハざるはなし。而して至要なる者、金銀銅錢鉛錫の類ニ及ハなし。曩時北亜米里加金磁甚少し、近來始て知る亜羅拉既俺山の東、北駕羅連、南駕羅、磤治亜、典尼西、亜刺罷麻等の都皆之あり。

文化七甲申年に取処の金を計るに、估価銀五十員に過す。五年ハ則一万七千員、六年二万員、七年二万一千員、八年四万六千員、九年十四万員、十年四十万六十員、十一年五十万員、十二年六十七万八千員、十三年八十六万八百員、十五年八十九万八千員、銀と銅及び水銀とハ則ち或ハあり、或ハなし。錢ハ則各処繁多にして用ニ勝す。惟錫及び各項珍宝甚稀也と記せり。

また采覽異言字露国の部に字露紀事二曰、初伊斯把泥亜国人此国を併せて其国王亜谷拔里拔を擒二す。国人これを釈さん事を請。因て国人を責て曰、金錢を以て其幽室ニ満なバ是を釈さんと云。国人即ちこれを満たす。随て其金を取収て更ニ又銀を満よと責む。国人又これを満す。

『坤輿図識』中の記事

アメリカの金銀と皇国の漆器陶器との交易は如何

唐・蘭との交易は無用の物が多い

皇国の人には唐薬、蘭薬より和薬が良い

此に於て其王を釈す。此幽室長さ二丈二尺余、幅一丈七尺余。伊斯把泥亜の人始て此に至りし時二見れば、馬具に悉金銀を多く用ひかざりとセリ。これに因て金銀の夥しきことを知れり。今此土産の諸物皆悉く欧羅巴に輸送する<sup>ユソウ</sup>とあり。

又坤輿図識<sup>コンヨズシキ</sup>に、把那麻村より日々に金板銀竿を輸すに、駟馬百余頭を役すといふ。是を以て世人新瓦剌那連<sup>ニハナ</sup>を称して世界中第一の互市場とすとあり、又同書ニ、墨是可の富者常に乗る所の車輪<sup>クルマ</sup>を銀にて造る者ありといへり。其他諸書にあれども略す。

如此南北の亜墨利加ハ、夥しく金銀の産する国なる故、長崎、箱館の両港のミにて交易をゆるし、皇国よりハ、下民の業となる漆器類、漆器ハ西洋の検夫爾<sup>ケンフル</sup>の著せし鎖国論に、人家修飾の漆器を見るニ、其美なる事実ニ驚くニ堪たり。支那人東京人が用心勤励を尽せるも、未だ曾て其漆を調製し及びこれハ塗類の巧妙通敏なるに及ふ事能ハすとありて、至て称美する容子なり。陶器<sup>セトモノ</sup>、竹細工ハ彼国になき故、竹細工類、又楠、榿、桑、桐等の器類、其内ハ楠ハ殊ニ称美する容子にて、日本製の一尺許の錢箱を、一貫六百文の銀錢四十文にて買ひたりとて、彼国の水主、清太郎に見せたりと云り。団扇、傘、絹布類等の無用のものを渡して、有用の金銀と交易なしたまハゞ、上下共富さかゆべし。

然るを是迄唐、和蘭等の交易ハ、彼国より持渡るものハ無用の哆羅<sup>ラシヤ</sup>、呃、猩々緋、毛氈、時規、其外奇器陰巧の翫物、或薬種等なり。

又薬品は有用の物にて、一日なくてハ済ぬものと思ふ人もあれど、こハ皇国の上古を知らざる故にて、万国ニ勝りたる大同類聚方抔云る医法ありて、和薬のミにて治療をなせしを、今

乙卯の年を去る事千三百二年前 欽明天皇十五年二月、百済国より医法渡りしより後、唐藥な  
らでハ治療ハならぬものと漢医ハ思へり。又今乙卯を去ル事二百十五年前寛永十八年巳年の年、  
始て和蘭の交易をゆるし玉ひしより、西洋医法も年々に精くなりければ、今の世となりてハ西  
洋医ハ蘭藥ならてハ治療はならぬものとかく思ひつれば、皇国に生れたる人ハ、皇国の藥種  
ならでハ実に病ハ治セざるもの也。

其ハ大同類聚方の奥書に、典藥頭丹波良康の記されたるにも、医方之在于我邦也自神世矣神  
国之民服他邦之劑而何応其患乎人応其土地而有廩氣之僻其土人服其土宜不可無効也、と記され  
たるが如し。又両三歳唐国の兵乱にて、大黃杯渡らざれハ医も俗も困りつれど、皇国ニも中  
古まで唐大黃にも勝りし大黃ありしなり。其ハ延喜式典藥寮の部に武蔵、下野、信濃、美濃等  
の国々より、年毎に進セし事記されたり。然るを何事も外国風となりて外国の藥品も有用のも  
のと思ふ人ハいと歎ハし。

有用の金銀銅と無用  
の物との交易は惜し  
むべきこと

さてかくの如く無用のもの、有用の金銀銅と交易をなすハ、実に惜むべき事なり。此又答問  
十策の記によれハ、正保四歳より宝永五歳迄凡六十一年の間、外国へ渡せし金銀銅を記したる  
を見るに、金二百三十九万七千六百兩、銀三十七万四万二千九貫目余、銅一億一万一千四百九  
万八千七百斤とあり、また慶長大歳より宝永五年まで、外国へ渡りし概略を積られたるニ、金  
七百十九万二千八百兩余、銀百十三万二千六百二十七貫目余、銅二億二万二千八百九十九万七  
千四百斤余とあり。又宝永六年より今安政二乙卯まで百四十七年の間渡りし数ハ算へ知かたか  
らん。銅は大炮となし、金銀は軍用專一の物なるを、かく無用のものと交易するハ実ニ惜むべ

き事なり。

また神代卷二

素戔鳴尊<sup>ソサノヲノミコト</sup>曰、

韓郷<sup>カラクニノシマハコレコガチシロカチアリタトヒワカミコノシラサランクニモウノタカラアラスバヨカラジ</sup>之島是有金銀<sup>テラクニノシマハコレコガチシロカチアリタトヒワカミコノシラサランクニモウノタカラアラスバヨカラジ</sup>若使吾兒所御之國不有浮宝者未是佳也、

云々とあるハ、上に謂如く、亜米里加州杯も金銀多く産する國成るゆへ、船を造りて無用の物と有用の金銀と交易をなして、皇國を豐饒になすべしと御神の御教ある事、よく／＼考へたまふへし。

サンフランシスコの街、三階建ての家

さて本港へ着船し其翌日夕陽、倉船の船長、漂民を陸へ連往、手勢<sup>テマテ</sup>しける故、陸に住居さす事ならんやと思ひ、病人万蔵、甚ハの外皆船長に連られ、始て此市中を見物したりしが、町の中程と思ふ所にて踊りを見たり。家造ハ三層楼<sup>サンガイ</sup>にて、四方屋根とも白く塗り、総窓ハ玻璃障子<sup>ギヤマン</sup>にて、内に赤き暖簾<sup>ノレン</sup>をかけたり。故に外より夜見れハ、らうそくの明りにて紅の暖簾、玻璃障子<sup>ビイドロ</sup>ニうつりて、其きれい成る事言語にのべがたし。

女性、笛・太鼓の音、大鏡に激突

さて此時は未だ目もよく見えがたま、二階の六畳の小間へ上り見れハ、歳頃三十上下の女、曲<sup>バカリ</sup>祿<sup>（衆か）</sup>に腰かけ居たり。又一方ニハ一間半許の腰かけを壁際ニ置き、其上に天鷲絨<sup>ヒロード</sup>の臥單<sup>フトン</sup>を敷あり。女、雑手伎<sup>テジナ</sup>して、腰をかけよといふ容子成共、詞分らず。又一方ニ呉らしき衣裳を多くかけたり。奥の間ハ笛、太鼓、胡弓の音聞えけれど、詞分らず。されと戯場<sup>シバイ</sup>にてもあらんと思ひ居たり。其次の間を見れば、吾より早く連ハ行たりと見へけれハ、吾おくれじと急き入らんとすれバ、入口にハあらで大鏡なりしをしらで、百会<sup>アタマ</sup>をうちたり。彼の女を始め大に笑ひたり。此時ハ目も定かに見えす、其上しらぬ処成ハなり。

大広間は昼間の明るさ

さて外の入口より入て、此間を見れば、十間四面許<sup>バカリ</sup>成大広間にて、天井より大成玻璃<sup>ビイドロ</sup>の灯籠を

多く釣さげたれば、明き事<sup>ヒル</sup>昼の如く、又三方ハ一間程づ、置て、間中づ、の硝子障子の窓にて、紅の暖簾を御戸帳の如くに開きあり。これ皆外より見たる障子成事をしらず、神社ならんと思ひ<sup>ツガ</sup>拝ミ<sup>ミ</sup>拭したりし者もあれハ、又船長を始其辺に居合ふ人々大ニ笑ひたり。

笛・太鼓のお囃子の  
もとで飲食、博打

さて次の間にて聞し戯場の音曲と思ひたるハ、然にハあらて、高場にて五六人椅子<sup>イヌ</sup>に腰をかけ、笛、太鼓、胡弓<sup>コキウ</sup><sup>ツ</sup>杯にてはやすのミにて、戯場<sup>シヤイ</sup>もなく、又其高場の下にハ菓子、鶏蛋糕<sup>カキテラ</sup>の容なる物、其外市店多くあり。又一方にハ酒或ハ豚<sup>ブタ</sup>、牛なとくさぐさの珍珠ヲ売、又蜜柑の絞り汁を水に和して売<sup>ル</sup>る店もあり。又砂糖水をうる店もあり。又一方にハ大勢あつまりて、皇国と同容の博<sup>サ</sup>□<sup>イ</sup>子博奕を<sup>ス</sup>する店もあり。

竜宮へ行った心地

扱、此処、富戸<sup>フゲンシヤ</sup>の遊場とミえて、衣類杯も美麗なる人のミにて、吾々へ銀錢を呉れ、また酒を飲<sup>セ</sup>、酒を飲さる漂民にハ蜜柑<sup>シホ</sup>の絞り汁、或ハ砂糖水を飲し呉る夷人も有。又銀錢を呉れて博奕をせよと進むる者もありて、誠ニ漂民等の目より見れハ、昔に聞つる龍宮へ行たる心地なり。

金持ちのための遊び  
場

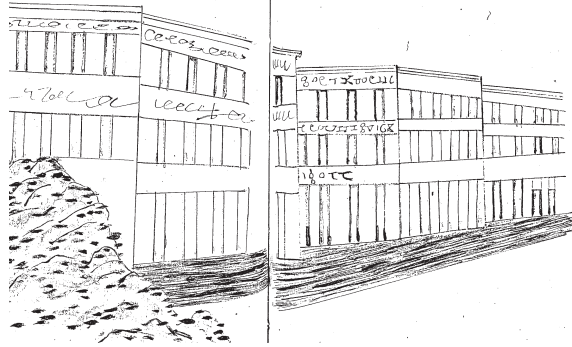
さて五半時頃とも思ふ頃より、追々遊人も来りて、高場にて囃<sup>ハヤ</sup>す音曲に合せ 皇国の如く手ハあげざれども、足拍子<sup>フダ</sup>にて踊る。此時漂民始て戯場にはあらず、富戸<sup>フゲンシヤ</sup>の踊り杯する遊場なる事を悟りぬ。其踊りといふハ、男同士踊るも有、又妓女遊女どもと思しき者と手を取合て踊る男も有、又次の間にて見し衣裳<sup>イシヤウ</sup>をかり踊るものも有。さて往し時ハ梯より登りて二層楼<sup>ニカイ</sup>なりと思ひしに、帰る時、一方の入口より出けれハ平夷<sup>ナダラ</sup>なる地にして、今まで二層楼<sup>ニカイ</sup>と思ひ居たりしも二階とハ見えす。互ニ疑ひ思ひつ、少しまはりてミれハ、今平地と思ひしハ一方の小高き地にて、元の如く二階<sup>ニカイ</sup>成れハ、皆心惑ひてあきれ居たり。

その後も度々街を見物する

三、四階造りの建物に様々の店が入っている

家屋

サンフランシスコの略図



家屋

サンフランシスコは近年アメリカの領土となる

さてその夜は船長ニ連れられ本船ニ帰り寝たり。其後度々街市を見物したるニ、繁華にして美成る事いはん方なし。家は三階四階造りにて、其下にハ酒店販食人トケイシ、コマモノウリ、ヤホヤ、時規匠、貨郎兜、呉服或ハ金物、菜鋪、藥物店、魚肉獸肉類、料理屋、遊女屋、鬻書、囊家、其外売買の店夥しくありて、一々記しがたし。二層楼、三層楼、四層楼、一軒持もあり、又相住居もありて、画生書師、刻字匠、其外工作人等色々借宅をなせり。戸三千許、寺も四五ヶ寺あり。寺の事ハ第四の巻に委しくいふべし。

清太郎、此地にてもらひたる市中の略図あり。

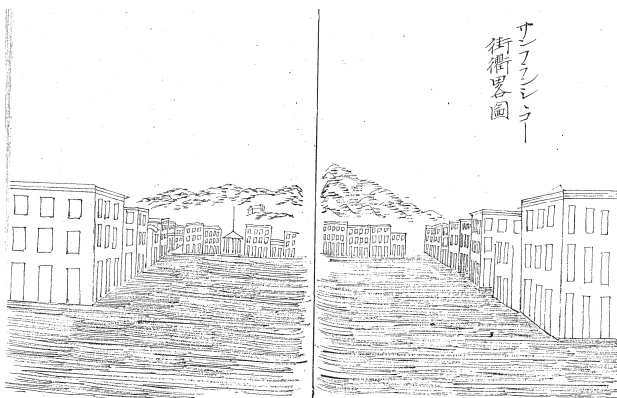
今こゝに模写しつ見合すべし。

又衙庁と思しき処も有。東ハ別して繁昌にて、家もヤクシヨ。多く、海に杭をうちて其上に板をならべ、其上に立ぬるかけ出しの家多く、又浅き沙場にハ船をならべて家となせしも多くあり。又町はなれて北の方に小き山あり。其上ニ遠見の家ありて、前の図のごとく標を立て、港口より、腹に車有蒸氣船入津セハ、横木を二本出し、又艫に車有船入津すれハ、横木一本を出て市中へしらしむる遠見番所あり。

さて此市中は川なく、井戸ハ稀ニして、水ハ船ニて外より持運ぶ也。此地四五ヶ年已前ハ墨可是

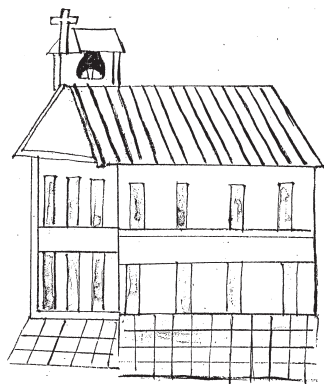
サンフランシスコの  
隆盛（安民曰）

サンフランシスコ  
街衢略図



サンフランシスコ街衢略図

寺観



寺観

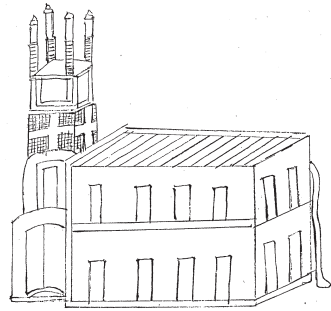
所有なりけるを、近年合衆国のものとなりし。又開け  
たるも四五ヶ年前よりの土地成るゆへ、田作といふも  
のなし。

此地開墾の事、四の巻にくわしく云べし。

安民曰、「サンフランシスコ」の日々月々に  
盛旺なる勢ハ、天下ニ比なからんと覚ゆ。さるハ、

本年<sup>フラン</sup>蘭西船に送られて帰り来りし三河国田原の漂民の説に、「ニウヨラカ」より「サンフラ  
ンシスコ」へ通ふニ山脈<sup>ケツ</sup>嶮にして通ひかたかりしを、鉄<sup>テツ</sup>を鍛<sup>キテ</sup>ひて火輪車の通路を付たるゆ  
へ、「サンフランシスコ」の繁花往年に百倍し、遂に大城を築き大商館を営るを目撃<sup>モクゲキ</sup>しける  
ゆへ、何故かく経営するにかと問けれハ、彼国人答て、此港ハ「ニウヨラカ」よりまさる大都

## 寺観



寺観

金銀が掘り出され市中は繁昌

漂流民、帰国を願う

役人の指示で、鉄造艦ボーク号に移される

会とならんこそ、といへる由云へりとぞ。  
安民、客年此好港を開けるよし清太郎等に聞て一驚し、本年亦右の説を聞て再驚す。かの頭目の意、遠く吾皇国を誘回して普く世界に令せんとする察せずむハ有べからず。

又国産等もなし。されど北の奥より金銀の出る事夥しき故、市中ハ誠ニ興旺也。諸国より入る数千艘の船ハ、他国の産物を積来りて、金銀と交易なすゆへ、天下の産物一つとしてなしといふ事なし。又うり入ハ、車に諸物をのせ、馬に引せて売也。又町幅ハ五間許成ゆへ、車五六丁も並ぶ也。

さて漂流民は、去戌の十月廿九日より五十日ばかり大洋に漂ひ、夫より又異船にて四十三日許飢渴に苦ミ、其上何千里ともしらぬ夷国へ思ひよらずの漂者成ハ、十七人の者一統、父母妻子兄弟の事を思ひ、一日も早く吾国へ帰らまほしく、日毎に思ひ弥まし、帰国の程を異人に問ハんと思ひつれど、言語通セざれハ、手勢にて己か身ヲ教へまた皇国と思ふ方を指点、掌にて帆の形をなし、口にて吹さとし杯すれハ、領て皇国へ送り遣すと雑手伎にて教へ呉る異人もあり。或ハ頭を揮て往ぬといふ手勢する異人もありけれハ、皆いかゞハせんと思ひ居たりしが、

同二月廿四日ならんと思ふ日、枝船二艘ニ公吏とも思しき者二人、異容の物を冠り、牡丹附の筒袖ニ股引容のものに沓をはき、羽織共思しき物も筒袖牡丹附にて、両肩に金糸の縫有て、太刀剣ハ

帶せざれと公吏と見えて、十七人の者へ雑手伎にて、此枝船へのれと指点ける故、必定 皇国へ送り呉る事ならんとよろこび、夫より本船に乘移りミレバ、其船ハ惣鉄にて、長さ二十三間許、横幅大凡五間許、鉄板厚さ四分許、大炮ハ四貫目許成もの四挺、小筒ハ廿挺計り、槍二十筋ほど、其外武器容の物さらに見当らず。異人七十人許乗居たり。

さて此船に乘移しハ昼の四時とも思ふ頃にて、間もなく三尺四方位成襖容の物を漂民の前へ敷けるゆへ、何事成らんと思ひ居たれハ、米飯を平鉢容の物に入、又口なき湯桶のこときものヲ出し、

ボーク号での食事

\* 「食器」の絵あり（略）

\* 「食器」（匙、庖丁、刃）の絵あり（略）

又手提やうの物に上茶を入れ、匙、熊手を出し、式食ハ胡瓜の酢漬にて、又蜜、砂糖を出し、匙にて米飯をすくひ喰ひ、湯桶やうの物に上茶に砂糖を和して飲み、又蜜、砂糖ハ匙にて食へかけ喰へと雑手伎しける故、皆々蜜、砂糖を飯にかくひたり。

二か月振りの米飯  
今も忘れられない

さて漂民ハ、是迄異船にて三度米食をなしたる事有ど、異人ハ飯の焚やうを知らざるゆへ、五合許焚べき鍋にて八合許も焚けれハ、種米の如き飯成を、十七人配分して御供米をいただきました如く、少しつゝ喰ひたる事ハあれど、かく食せしハ六十三四日目なりけれハ、其時の嬉しき事今に忘れがたし。かの胡瓜ハ二三寸許にて、外国の渡来にて四季共々あり。

布団を支給される

その日、人毎ニ臥單二枚づゝ与へ呉たり。敷臥單ハ雲斎織にて綿ハ入らず。俗にいふ「ジナゴ」

朝昼は米、夜はパン

といふ草を入れたり。又着臥單ハ一重ニて毛おり也。広さ二畳敷余りニて、たゝミて着る臥單也。

其後船中の食物ハ、朝午兩度米飯、戴食ハ胡瓜の酢漬、塩牛塩豕又ハ魚類也。されど味噌、醬油、漬物ハなし。又夕食ハ蒸餅也。此迄三度とも米飯成しか、七十人の上へ又十七人も乗込て鍋足らざる故、夕食ハ蒸餅ニなし呉かしと頼みつる故、其後米飯ハ二度と成たり。

アメリカ産の米の形  
扱、米の形ハ 皇国のごとく平身成らず、細長く丸実成。味ハ二三年も経たる大唐米の如くにて至て軽し。

追考

追考

皇国の米

米ハ 皇国に生まして今も常磐ニまします稻蒼魂命の御魂によりて産出るものなり。また

皇国ハ神の生給ひし国にて、北緯三十度より四十度の中央地ニて、平田篤胤の「たまのみはしら」、又西洋の「ケンブル」抔もいへる如く、南国の如き熱日に晒れず、又北国極寒の凝凍もなく、又国土も大ならず小ならず、四方海岸、嶮岨多石ニして海浅く、内海肥沢なる故、人ハ猛烈強勇ニして、米ハ年々に八束穂にしなひて美しく、豊饒にして異国に卓越たるハ、この理有（頭注による）バ也。又清太郎いふ 皇国の米ハ平実に短くして甚厚味也。異国の米ハ此に反して長くして其味甚輕しと。

諸書は、南北アメリカは米を産すというが：

さて采覧異言、

坤輿図識、

海国図志、

其外諸書に、南北亞米里加に米を産する国多く記した

れと、万次郎いふ、都府近き「ヌーベツソータ」の土地にハ米なく、唐天竺より精米ニて渡り、病人有時ハ粥に煮て与ふ。彼地の食ハ蒸餅といふ厚味成物ゆへ、病人にハ宜しからず。米ハ輕きゆへ病人によろしといひて給させ、又養馬の餌などになすなりと云へり。又弥市ハ亜米里加

皇国のような美しき  
米は産しない

交易を願ひ米を懇望  
するのはロシアのみ

ボーク号の構造…帆  
柱のこと

洲の内、米を作る処ありと聞けど、「サンボセ」辺にハ見受すといへり。此ハ南北共亜米里加は砂地にして水乏敷国なるゆへならん。

然るを諸家の飢訳書に米を産する国多く記しあれと、一々ハ信かたし。然と北亜墨里加も国処によりてハ少々瘦米の産する国もありとミゆ。又南亜墨里洲も国処ニよりて産すと見えて、環海異聞ニ、米ハ精米ニて南亜米里加洲の地方より来る品のよし。精米ニて交易す。二合五勺極にて銅錢百枚極なり。米粒細くして風味ハあし、といへり。何にまれ異国ハ 皇国の如く美き米ハ産せず。

鳥獸魚等の肉或ハ蒸餅杯を常食として米ハ好まず。此ハ、菜葉に生たる虫ハ菜を好ミて桑の葉を食せず。桑の葉に生ずる蚕、葉を好ミて菜の葉を食せざる類ニひとし。然るを亜米里加、英吉利須、其外国々より 皇国へ来りて交易を願ハ、世の人米をもらひ度故にやあらん杯言けれど、米を懇望するは魯西亞のミにて、其他の国々ハさニハあらぬなり。

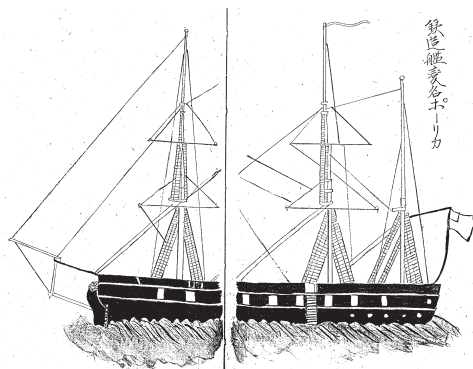
さて鉄造艦といふハ長さ二十二三間許、横幅三間半許、深さ三間半許、水入一間半許、二層樓造りにて、桅竿三本、中の柱長さ二十間許、太さ四尺許の丸木ニて、下の柱ハ三柱とも白塗なり。表の帆柱の長さ十七間許、太さ中の柱と同じ。艦の柱十五間許、太さ三尺四五寸ばかり。

三本とも柱の根元ハ船底まで通り、第一の図の破浪板に啖合セ、其上一階の床板の船桅の間へ通し、又横木を入れて固くしめ、二階目の床板もか（頭注による）くの如くに檣をしめ、また檣中表は継目二処ありて、上成継目ハ風あらき節ハ、第八の図のごとく継たる処の栓をぬき、下へ抜き卸して船中ニ横にして置なり。次の継目ハ七の図の栓を抜て卸セども、其俣立置て拔さる也。下の柱、二

帆のこと

錨のこと

マツラのこと



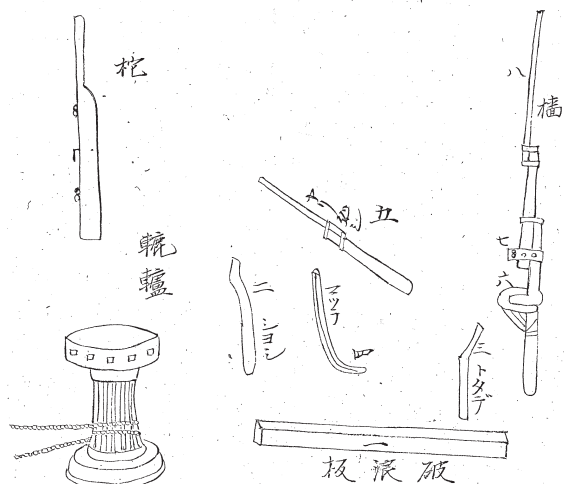
鉄造艦変名ポーリカ

階目の床板より高さ八間許上に、第六の図の如く二畳敷許にて半月の形の如き櫓ありて、夫より長さ八間許の繩梯ナワバシゴを船傍の外へかけ、根を鉄テツにてかたくとめて引張るなり。

さて此櫓にて平日ハ帆杯の世話をなし、又非常の節ハ望遠鏡にて遠きを窺ひ、又鉄炮テツポウなどもこより打為に設けたるものと見えたり。中柱の下フタの帆ハ幅二尺五寸許の太木綿二十三端許、其次の幅十八端許、第三段の帆ハ十四端許、第四段の帆ハ八端許、表の帆ハ同容なり。櫓の帆ハ商船の如く二て、下の帆ハ幅十二端許、上の帆ハ三角にて幅十端許、第五の図のごとく表に「ヤリタシ」ありて、其先より表櫓二つ目の継目へ綱をはり、幅八端許にて三角形の帆なり。帆綱の懸容、帆のあげさげの仕法ハ下条に委しく云へし。

又四角イカリ又ハ二挺あり。大（頭注による）なるハ重さ百二十貫目許、小成ハ百貫目許、綱ハ鎖クサリにて百二十尋許、船標ハ図の如し。

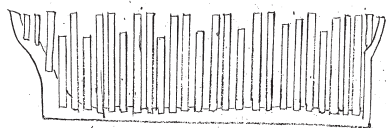
さて鉄艦の製造ハ第一の図のごとく、長さ二十間許、幅三尺四五寸許、厚さ三寸許成波切といふものに数百の穴有て、それへ第四の図のごとき長さ四間半余り、又櫓表トモニてハ少し短く箱の角金スミカネのごとく折りたるものにて、厚さ二寸位、幅四寸許、是を「マツラ」と云。さて此「マツラ」を波切の左右の穴へさしたて、外より厚さ四分許、長さ釘にて「マツラ」へうち、内より釘先を屏釘ビヤウナギの如



舵・轆轤

櫓など

船ノ下組

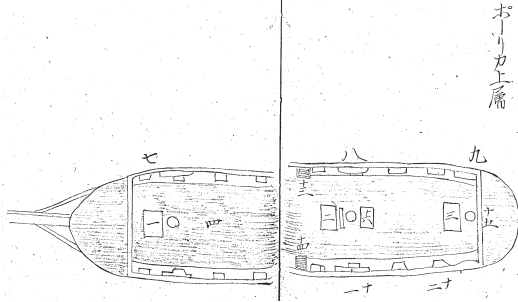


船ノ下組

をはる事、前の如し。又船の艫も三の図のごとき「トダテ」に「マツラ」を立組也。

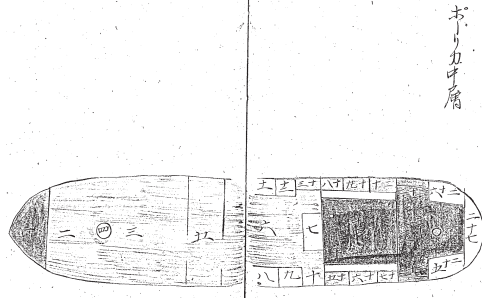
扱、かく組立て総て外より張詰たるのミにて、他の木船のごとく内より裏板はうたざる也。されど炮門其外見ゆる処の小口ハ、「マツラ」の厚さに鉄をはりたるゆへ、表のミ見たる時ハ総船の厚さ八寸許にミゆる也。一階目の左右は「マツラ」と「マツラ」の透間へ角木を入れ、夫へ内より板を打付る也。「マツラ」ハ鉄にて釘きかぬ故ならん。又かくなしたるハ内の見よき為成らん。

ポーリカ上層



ポーリカ上層

ポーリカ中層



ポーリカ中層

上層の一、二、三ハ二層樓の入口にて、左右より組合せし梯二挺有。四ハ板敷ニテ船業を成、又非常の節は鉄炮などうつ処也。丸き穴ハ檣の穴也。五ハ四尺許の高き板敷也。其下は船具の置場也。六ハ厠、七より十一迄ハ帆綱をゆひつける所ニテ、其外ハ繩梯をゆひ付る処也。十三、十四ハ枝船ヘ下梯也。十六ハ金剛心バリにて、下層のあかり取也。十五ハ五尺四五寸許高くして、其下ハ仕切ありて、右の間ハ医者<sup>ハシゴ</sup>の居間、左ハ浴室、又左右船舷<sup>カハヤ</sup>の高さ五尺あまり、表の方ハ四尺許の高さ故、船縁一尺許也。

さて船底は「マツラ」のミにて、板ハはりてなきゆへ、此船の製造ハ船底を見て記す也。又舵ハ第九の図の如く臂<sup>ヒデ</sup>坪ありて「トダテ」につけ、又舵の長さハ三間半許、幅二尺位也。又舵の取容ハ下に委しくしるす。

又表の出たる所を「ヤリダシ」といふ。此長さ三間許なり。

次に船中を委しくいはん。

又艫の左右船縁ハ鉄の垣有。又左右に大炮十六門あり。又下層の一標ハ物置、二ハ炬ヒドロ、三ハ船方の寝間也。四ハ檣の穴、五ハ漂民の子舎ヘヤ、七ハ桅竿ホバシラのかこひ、八ツハ米、砂糖、豕の油、豆、灯油等の置場なり。九ハ蒸餅ハンの置場、十ハ料理場にて、食器の置処なり。十一、十二ハ帆の置場、十三ハ笛吹の居室、十四ハ食する処、十五より二十迄役人の居室、二十一ハ客室、二十二、二十三ハ腰懸也。(二十四か)十四ハ檣の穴、二十五ハ公吏頭の居室、二十六ハ船長の居室、二十七ハ蠟燭、其外諸道具の置場なり。

ボートのこと

さて十四より二十一迄、毛氈を敷詰あり。船底ハ船脚のため数千斤の鉄を入置、又塩牛、塩豚、薪、其外雑物、或ハ鎖綱クサリヅナ、また大成鉄の水を貯ふる箱數十あり。又枝船テシマ四艘あり。枝船の総名を「ボーシ」と云。又大小有といへ共、大抵長さ四間許、横幅五尺五寸許、深さ四尺斗り。櫂カイ六挺、長サ二

間半許也。

スクーナーのこと

枝船

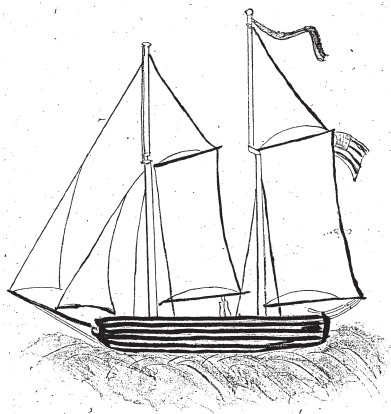


枝船

又通船十艘あり。名ハ「シコロ」といふ。図ハ此ニ記す。長さ七間許、横幅八尺許、深さ六尺五寸許、牙檣ホバシラ二本、継目一ツ下四間上三間、又「ヤリダシ」二間許、帆六ツ下二ツ、横幅六端つ、上二帆、三角広き処にて六端、表二帆ハ広き処にて五端、又帆の懸かたハ図のことくニして、風にしたかひ左右を

ボーク号船員の構成

### シコノ通船



シコノ通船

成なり。又鉄造艦の名を「ポーリカ」といふなり。

さて船中公吏<sup>ヤクニシ</sup>、其外水主<sup>カコ</sup>の名あらくしりたるをいはん。船長の名ハ「ハンダ」、又其後都府の「ニウヨラカ」より交直<sup>カハリバン</sup>に来る船長の名「カオン」、下役一人「テナシン」、一人「クイン」、一人「タメシン」、一人「シヤンキシン」、一人「チャレイ」、一人「アンドシン」、一人「シメテ」、一人「アリシン」、一人「ボウシン」、一人「タメスチャイエ」といふ。此人ハ唐国へ渡海後までも漂民に付添ひ世話なして、其後又唐国の金星より次作、亀藏、彦太郎等三人を「サンフランシスコ」へ送りし人也。次に炊役の名ハ「ケンキシシン」、その名ハしらす。

トマス・トロイのこ

ボーク号は監視船

又始終の容子を見るに武器のものもなく、一年余も此船に居れとも、更ニ炮術の演習<sup>ヤイコ</sup>も見ず。四艘の枝船<sup>テシマ</sup>にて朝夕出入の船を改め、又船長を枝船にのせて陸へ送りなと、日毎にする容子を見れハ、弥諸国の船を改め非常の警固をなす課<sup>ハダカ</sup>（裸か）船にて、「ニウヨラカ」より勤番したるものならん。又陸にも衙庁<sup>ヤクシヨ</sup>と思しきものありて、公吏頭<sup>ヤクニシ</sup>ハ其改庁より日毎ニ此船へ来り、又夜も船に泊る事もあれどそハ稀也。又此船原ハ「ニウヨラカ」にて蒸気船の軍艦ニ造りたれと、便利あしきとて帆船となして、此港へ送りたるよし。其時他の船ハ「ニウヨラカ」より六月成<sup>ムツキ</sup>は、八月か、りしと也。

又港内数千艘の船ハ英吉利須、和蘭、南亜米里加の衆邦、払郎察、魯西亞、「オウアイヒー」、其外諸島の船にて、港内の牙橋の誠に林のことし。又諸国の船荷揚の時ハ、陸公吏荷を改め資銀を取容子もミゆ。

追考

追考

清太郎、「ニウヨラカ」或ハ「タマス」、其外諸国の地名をいへど、此書を見る人、図なければいと得がたからん思ふ故、今万次郎の携へ帰りし地図を模写し、読人の便りとす。

南アメリカの盛衰と  
変革

又南亜米里加州の開墾、盛衰、治乱、変革、人情、物産等を、諸書の説を輯正して、亜米利加風土記といふ書を吾ものしたる内より、盛衰、変革を略し記す。今乙卯を距る事三百六十三年前明応二年、始て意太里亜国の閣龍、伊斯把爾亜の命令にて、北亜米里加国の古巴といふ大島を始て探り得たり。さて此迄ハ、亜米里加国ありといふ事さらに誰もしらさりしなり。第二の航海に、牙翼加といふ島を探り得たり。第一、三の航海に聖独眠悟といふ島を探り得たり。明応二年より十四年後永正三年ニ始て南亜米里加の大地を検出したり。夫より後永正八年ニ波爾杜加爾国の

\*「南亜米里加」、「北亜米里加」の絵あり（略）

の人「アメリカユス」と云者、閣龍の功を慕ふて、南亜米里加の瓦辣那達の地ニ至りて土地を開く。此より後西洋の諸国、南北亜米里加及び諸島を開墾する事、年毎ニ多くなりぬ。

コロンビア

チリ

ペルー

ラブラタ

ブラジル

現在のアマゾン  
州？

パタゴニア

南亜米里加州閣龍此亜国、この国ハ今乙卯を去ル事三百五十年前永正三年、<sup>イスハニア</sup>伊斯把爾亜国に併吞せられてより三百二十四年の間、彼国の属国也しか、三十四年前文政六年の戦争ニ勝利を得て、共和政治の強国とぞ成ける。

知里国、此又三百余年前<sup>イスハニア</sup>伊斯把泥亜に蚕食せられし国成れハ、三十六年前文政三年の戦に勝て、今乙卯に至る迄共和政治の強国と成る。

<sup>ベリカ</sup>露国、此又三百余年前より伊斯把泥亜領と成る。然るを近年ハ共和州となりたる由にミユ。

<sup>(利カ)</sup>剝伯辣達国、此国も三百余年前より伊斯把泥亜の属国なりしが、文化四年英吉利須に奪掠せられ後四年にして伊斯把泥亜に復す。されど今ハ<sup>ヒトリ</sup>独立共和国と成る。上の四国ハ皆独立の国なり。

<sup>ツラシル</sup>伯西児国、三百余年前より今に<sup>ホルトガル</sup>波爾杜瓦爾国ニ属すとあれど、此又今ハ共和の国ならんか、此国のミ属国成りといふ。

<sup>アマゾン</sup>亜瑪鑽国、此国ハ不毛の地成故、昔より今に西洋人も<sup>シンダグ</sup>侵奪成さず。又国主といふものもなきなり。

<sup>ハタン</sup>巴太温国、此国も不毛にて極寒の惡地成故、今に至るまで西洋人も侵さすといへり。

合せて七国の内、二国は不毛の国成ハ<sup>シンダグ</sup>侵奪して益なし。外五国ハ三百余年前より<sup>イスハニア</sup>伊斯把泥亜国、<sup>ホルトガル</sup>波爾杜瓦爾国等の金庫とも云上国成しも、三十五、六年前より戦ひ勝て、皆独立の国となりて、其勢益強大なる国也。

此の如くニ諸国変革すれば、能万世界の治乱、盛衰、人情を知り、海岸の武備嚴重になして、

アメリカ合衆国

二百余年飽くまで食ひ温に衣たる国を人を忘るへからず。

北亜米里加大合衆国、今乙卯の年を去る事大凡百九十二年前寛文三年の頃、初て英吉利須人此地へ人種を移せしより彼国の属国となりしを、安永、天明の頃十余年の間、英吉利須国と土人大に戦ひ、終に勝利を得て、七十一年前天明四年より三十一州を合せて独立の合衆国となる。又近年三州ヲ加へて三十四州と成りて、全世界一二の強国とハなれり。

カリフォルニア州

カリフォルニア、原ハ伊斯把泥亜に属す。今ハ合衆国の領と成れり。

フロリダ州

花地国、此又原ハ英吉利須国ニ属す。二十六年前天政三年より合衆国のものと成る。

ルイジアナ州

ロウイシアナ国、此又三百余年前より伊斯把泥亜国のもなり。然るを其後仏郎察国領となり、又五十二年前より合衆国に合す。此三州を合せし三十四州ハ、世の人の云北亜米里加の大

合衆国なり。

メキシコ

墨是可国、三百余年前より伊斯把泥亜国のもとなる。ざるを三十余年前天政六年に「マラカイホ」「カルタケナ」の二府を、南亜米里加の閣龍比亞の「ポリバル」に併吞せらる。

ニューメキシコ州

新墨是可国、三百余年前より伊斯把泥亜国のもとなる。然るをおりく合衆国より侵すといふ。此二国ハ伊斯把泥亜国領なり。

グリーンランド

臥兎狼徳国、此地極寒不毛成とも、魯西亞国より物産を取集む故に、彼国のもとなれり。

此他島々の変革ありといへとも、本書にいづりて略す。年数杯ハ海国図志と大同小異あれど、こゝにハ坤輿図識によりてしるす。

さてかく南北の国々ハ中古より独立の強国と成ければ、異人なりと侮りて右を忘れむを緩に

ボーク号上で帰国を願いながら過ぐす

市中の屠殺場の様子

夫婦は手をつなぎ市中を往来する

博打場が多い

船内で皇国の地図を見せられる

参考

皇国地図のこと

すべからず。

さて漂民は着船すれハ、其日より帰朝の事のミ思ひぬるゆへ、此鉄船へ乗移れハ、此船にて送り呉るにもあらんと思ひ居たりしに、さハなくて港の課船<sup>ヤクフツ</sup>なる事を悟りて、此上夷国の土になりぬる事ならんと歎き悲<sup>カナ</sup>しミて、いたづらに月日を送り居たり。

又市中ハなれに牛を殺す処あり。度々往て見るに、十四、五間許の板囲をなして、二方の板囲の外に高場をこしらへ、夫々より綱を輪に成して角<sup>ツノ</sup>へ引懸<sup>カケ</sup>、其綱の端を一方の室<sup>ムロ</sup>へ轆轤<sup>ワタリ</sup>にて引込、土間の鑢<sup>カ</sup>へ頭をひきよせ、片刃なる者斧にて首を切り殺し、皮を剥<sup>ハ</sup>き、肉ハ車<sup>クルマ</sup>にのせて市中へ持行て売なり。かやうの所五、六所もあり。一構<sup>カマヘ</sup>の内、牛百疋或ハ百二十疋或ハ百二、三十疋もありて、日毎に殺すなり。

又土人の市中を往来するを見るに、夫婦手を引、小兒ハ跡より往なり。夫婦の情、至て厚き容におほゆるなり。

又囊家<sup>ハツヤド</sup>をなす店多くあり、四、五箇所<sup>ゴ</sup>に台<sup>ダイ</sup>を置いて、諸人集りて博奕をなす。

又船中にて万国の図を見たる事あり。其内にこれは日本なりとて京、江戸、大坂、長崎、其外国々の海岸を細密にしるしたるを見せたり。異国にてハ 皇朝の事ハ何国にても詳密の容子也。

参考

皇国地図、物産及人情杯の事ハ異国にてハ委しく知りたるならん。そハ「ケンプル」の鎖国論文、又魯西亜人の記したる遭厄<sup>ソウヤク</sup>日本紀事及ひ奉使日本紀事<sup>行カ</sup>、又蝦夷乱妨記<sup>記事カ</sup>に蝦夷地勤番の荷物を洋中にて魯西亜人奪ひたる事記し有ハ、其荷物の内ニハ地図、武鑑等もありて、彼地へ渡

りたらんもはかり難し。又辺要分界図考にハ西洋人の記セシ 皇国の図ありし。海岸ハ悉く蛮語にて記し、又安房の辰巳に 皇国の人も未だしらざる「テゴルウルチス」と云七島、又「レスマリス」と云四島、又南方に蛮名の島多くあり。こハ無人島成らん。此外 皇国の地図、物産、人情等を記したる書数多あるハ、世の人よく知りたまへる事成ハ記さず。

異人は皇国の事情に詳しい

又異国へ漂流なして今に住するもの夥しく有ハ、皇国の事、実ハ自ら異人も詳密成ぬらん。扱、斯異人ハ 皇国の事実何によらず詳密なりぬる上、皇国人彼国にて訳語人或ハ士杯に成居る世成ハ、海防武備にも其心得あらまほしき事也。猶、委しき説ハ下の条々にゆづる。

ポーク号で支給された衣類、靴など

さて此船にて、漂民十七人のもの銘々もらひし物ハ文羽に似寄し毛織にて、一重の筒袖襦袢二枚、上着に成す黒羅哆呢筒袖襦袢容の物二つ、又文羽に似寄し毛織の股引二足、また黒羅紗の股引一足、革沓三足、鍬一挺、剃刀一挺、櫛一枚、莫大小に似寄し俣のなき足袋一足、其外品々、数多く水主杯二も貰ひたれと、一々しるさす。

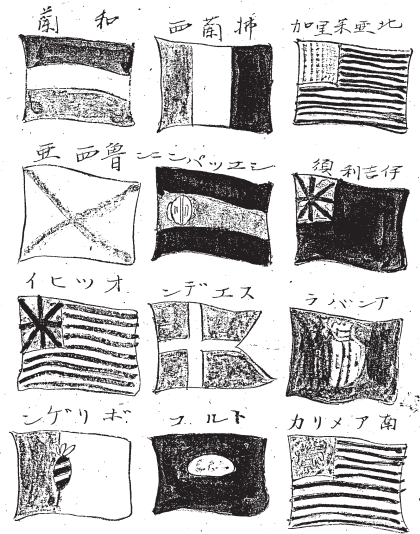
ポーク号での食べ物、異人の食事

又此船中にて異人の食物ハ蒸餅、生牛塩牛、生豕塩豕、芋、又小麦の粉に葡萄の砂糖漬を入れてきたるもの、又豆の中へ塩豕をいれてたき、又米飯も折にハ喰ひすべし。異人の食物といふハ何といふ定りなく、又 皇国のことく式食と定まりし事もなく、何物にても銘々の好むものにて腹さへ満ハよしとする国の習俗なり。されど夷人ハ 皇国人に比すれハ小食也。ゆへに力もや、劣りたり。又船中の囲房ハ上官の者ハ棚に寝、「ソウシヨウ」、水主、炊杯ハ帆木綿を長さ五六尺許、幅三尺許にして、四角又左右に鑲をつけ、夫を天井裏に引懸、其内へ一人づゝ入て寐る也。

米  
国  
独  
立  
記  
念  
日  
の  
祝  
い

又 皇国の六月四日と思ふ日、大炮を発し花火を揚杯したり。彼国にてハ此日を「ホーテジュ

各国の船印



各国の「船じるし」

ラー」といふ。中古英吉利須に勝て合衆  
国となりし

\* 鋏、櫛、剃刀、ナイフ、ワイングラス、  
車の絵あり（略）

日にて、今に其日を祝ふなりとて、船中  
の物共一統、酒肉にて終日遊ひたり。其  
内に三日月の花火あり、月の落さる事半  
時許なり。江戸にて見たる事あれど、か

く久しく落さるハ始て見たり。

又硝子行灯並に小兒乗遊び居たる車、又船じるし、あら／＼見覚えたるをこゝにしるす。

東西異聞卷之二終

東西異聞式之終